

パイデイア（そのXVI）

——パイデイアとしてのギリシア医学——

プラトンが口にする医者と医学の条件はきわめて高く、これに証拠を仰いだなら、前五世紀末と前四世紀にギリシアの医業がいかに高い社会的・知的な名声を掛け値なしに誇っていたかは——たとえ初期ギリシアの医学文献がすべからく失われたにしても——十二分に推測できるのではないだろうか。プラトンの考える「医者」は、高度に専門化して見事に洗練された知識分野の代表者であり、それゆえ厳格な職業規則の具現者であつて、知識と実践の望ましい関係を明示する「無比の手本」にはかならなかつた。だからかれは、人間生活の基本構造を改変するの理論的知識がいかに力を発揮するか、をしつかりと読者に理解してもらうべく、この手本を頻繁に引用している。このように医学は、かれの口から再三に互つて言及されたが、もしもこの手本を欠いたなら、プラトンの対話篇であまたの論議の的となつた「徳は知識である」というソクラテスの教義も、とうてい考えつかれなかつたにちがいない——およそこう口にしても決して言い過ぎにはならないだろう。当時における——数学や自然科学も含んだ——人間的知識の全分野を見渡しても、ソクラテスの倫理学にわけても近いものとなると、やはり医学にまさるものはない。それゆえ医学に吟味のメスを入れなくてはならないが、それは医学が、ソクラテス、プラトン、アリストテレスの哲学へと導く知

G・ハイエツト
村島義彦 訳

的發展を単に準備したからではない。医学は、単なる職業技術以上のものに、すなわち、ギリシア人の生活を導く強烈な「文化力」にまで成長したが、これは、当時の医学が具えていた「様式」に負うところが大きい。この時点から医学は、いくばくかの反対をものともせず、いつそう「普遍文化（エンキュクリオス・パイデイア）」の正規の一部となつていったが、そうした名声の回復は、今日の文化の中ではとうてい図れまい。昨今の高度な發展を遂げた医学は、「人文の世紀」におけるギリシア・ローマの医学文献の再発見にいくら負っているとはいへ、あまりに専門化しすぎて、ご先祖さまと同じ位置を占めるなどとはや叶わないからである。

医学は、のちのギリシア・ローマ文化に完全に組み入れられていったが、これを最もよく眺めたいなら、ガレヌスのギリシア的見解とか、あるいはカトー、ワロ、ケルサスなど「博学の人士」——一人として医者はいなかつた——のローマ的見解に目を向けるに如くはない。これを介して得られるのは、前五世紀の後半に——さらにはその後——どれほど大きな影響力と名声をこの学問が勝ち取つたか、の認定でしかないけれども……。ともあれ医学は「榮えある地位」を手に入れた。それにはいくつかの理由があつて、第一には、この時期にはじめて、幅広い普遍の見解を身に付けた第一級の人びとに代弁され、ために高次の知的

レベルに至って、それを数世紀に及んで維持した点が挙げられるだろうか。第二には、哲学との論争をくり広げるなかで、驚くほどの栄養を得て肥え太った点が挙げられてしかるべきかもしれない。この学問は、みずからの目標と方法をはっきりと理解し、みずからに固有の知識概念を古典的な形で表明できたからである。ギリシア文化は、つねに「魂の文化」であると共に「身体文化」でもあった——後半の事実はいくつでも重要にちがいない。そのような事実は、「音楽（ミューズの技・文芸一般）」と体育という、初期のギリシア教育の二層構造にもしつかり体现されていた。知的な領域では哲学者が、音楽家や詩人に並んで登場し、身体的訓練が口にされる際には、訓練家と医者がつねに並んで記述されたのだが、これこそ、新しい時代の証しにほかならない。医者は、古典ギリシアの世界では独特の地位を占めていたが、これも「パイディア」と関わっていたからであった。体育を跡付けるにあたり、われわれは、ホメロスからプラトンまでの発展の軌跡を追ったが、それも、前者の詩を介して体育の諸理想はみずからの形と色を手に入れ、後者のおかげで、人間生活という枠組みにみずからの場所を勝ち取ったからである。しかるに医学は、体育と違って、早くから自己の文献をまとめ、これを介してみずからを開示し、世界規模で影響を及ぼしていた。ここから学ばれてよいのは——ホメロスも、医者技術の称えて「あまたの人士たちのそれと等価である」と口にしていないといえ——当の医学を実際に生み出したのが「理性の時代」を措いてない点にちがいない。

医学は、ギリシアの文明史に登場したとき、みずからが与える以上のものを受け取っていた。完全な形で現存する前五世紀と前四世紀の医学文献はすべからず、イオニア方言の散文で綴られていたが、この事実は、この学問の独立した地位を何よりも証しているにちがいない。そうした文献のいくばくかは、おそらく、イオニアの地でまとめられたのだろう

が、だからといって、すべてが説明し尽くされるわけではない。たとえばヒポクラテス当人は、コス島に起居して教鞭を執ったが、この島の住民が口にしていたのはドーリア方言であった……。かれとその学派はイオニア方言で作品をまとめ、おそらくは、学問的な論議にもこの方言を用いたであろうが、それを説明づけるには、すぐれたイオニアの文明とその学問の影響を挙げるほかはない。いつの時代にも医者は目にされたが、ギリシアの治療技術が目標意識を具えた方法的学問にまで発展できたのは、それが、イオニアの自然哲学の影響を感得したからにほかならない。われわれが、ギリシア医学に最初に出会うのはヒポクラテス学派の文献においてであって、この学派はしかも、きわめて露骨な反哲学の姿勢を示したが、この点に晦まされて、先の事実が等閑に付されてはならない。わけでも初期のイオニアの自然哲学者たちは、あまねく出来事の「自然的な」説明をひたすらに追及し、あらゆる結果をその原因にまで遡って辿り、因果の全連鎖が不動の宇宙的秩序をいかに造り上げているか、を示そうと多大の汗を流し、あまねく世界の秘密は、偏りのない事物の観察と理性の力を介して洞察される、という揺るぎのない信念を携えていて、もしもヒポクラテス学派がこうした面々と対峙しなかったら、医学もとうてい「科学」になれなかったにちがいない。われわれは、紀元前二千年以上も前にエジプト王の侍医たちが綴った記録を目にして、その観察の正確さと精密さに驚きの称賛を送るのだが、かれらはすでに、原因概念と普遍妥当な理論の作成に向けた「道」をはるかに遠くまで歩んでいた。それゆえ、エジプト医学はなぜ、これほど高度の発展段階に達していながら、われわれが用いる言葉の意味での「科学」にならなかったのか、と問わない訳にはいかない。エジプトの医師たちは、高度の専門化と実験的観察についてほとんど学ばなかったが、理由は簡単である。エジプトの人びとには、自然を「一個の宇宙的全体」と

して捉えるという、イオニアの人びとには見事に果たされた事柄がどうしても果たせなかったのである。かれらは、今日ではよく知られているように、十分に賢く十分に現実的で、旧態依然としたピンダロスにみるギリシア世界の医学ではいまだに通用していた魔力や呪文をすでに克服していたが、しっかりした理論体系を創り出して真に科学運動を擁護できたのは、ひとりギリシア医学のみであった。この医学は、哲学界の先人たちに学んで、普遍的な法則を探り求める「術」を身に付けていたからである。

病気を支配する諸々の法則や、部分と全体、原因と結果の緊密な結びつきに向けた徹底して客観的な洞察は、早くもソロン——イオニアの影響を深く受けていた——において目にされたが、このように明晰で鋭い洞察力は、この時代のイオニア以外ではほとんど目にされなかった。ソロンは、ここに挙げた普遍的法則が実在すると決めてかかり、こうした想定に、政治的危機の正体は社会有機体の健康上の乱れを措いてない、というみずからの「有機体型」の教義を根拠づけた。かれはしかも、これとは別の詩で、人間の生涯を「七年毎の段階」に区分し、そうした段階は「周期」を描いて順々に続いていると考えた。この詩自体は前六世紀に書かれたが、中身たるや、「七日周期について」やその他の「ヒポクラテス」作品——すべてが年代的に降る——と大きく似通っていた。というのも後者は、前者に似て、諸々の現象を支配する法則を、七という数字に関わった類似物に溯って跡付けがちだったからである。これは、ソロンと時代を同じくするミレトスのアナクシマンドロスの宇宙論でも、もつと後には、イオニア人のピュタゴラスとその学派でも目にされた。それぞれの年齢には、そこでのみ「最高に開花できる」ものが宿っている、という発想は、すでにソロンに登場していたが、もつと後には、医学的な食養生論の基礎として再び顔を覗かせた。自然哲学の手で創造

された理論はこの他にもあつて、たとえば、自然現象はすべて「法に適った償い」とみなされてよく、事物は、これを次々と支払っていくのだ、というのもそうだろう。これ自体はしばしば医者の中にも登場し、当人の説くところによれば、生理的な病理事象は「償い」ないし「報い」だったからである。これと似通ったものに、「イソモイリア（構成する基本要素がすべてからく協働すること）」こそ、生物有機体ないしあまねく自然の正常な健康状態にはかならない、という発想がある。こうした発想は、医学者のまとめた「空気、水、環境について」や、その他の関連作品にも顔を覗かせているのではないだろうか。ギリシア医学におけるこれ以外の発想、たとえば「混淆（クラシス）」や「調和」は、果たして自然哲学に由来したのか、それとも、自然哲学が医学思想から借り受けたのか——こうした点は、いまだ霧の彼方に留まっている。

これに対して「ピュシス（自然ないし本性）」という主要概念の起源ならほとんど疑いを容れない。教育過程全体の基礎となるべきは人間の「ピュシス」である、という発想の画期的な重要性については、ソフィストとその教育理論をつぶさに論じた際に触れておいたし、同じ発想が、トゥキユデイドスの歴史にしっかりと応用されていたのも、すでに目にしておいた。後者の歴史的考察は、「人間の本性」といったものが存在し、これは、いかなる時・いかなる処でも変わることがない、という仮定の上に築かれていたからである。ソフィストもトゥキユデイドスも共に、他のあまたの点に加えてこの点でも、当時の医学に深く影響されていた。人間の本性（ピュシス・トゥー・アントロープー）という観念を発見して、その上にあまねく仕事を基礎づけたのは、ほかでもない医学だったからである。もつとも、この点では当の医学も、イオニア哲学の「大いなるピュシス（大宇宙の本性）」という観念にひたすら依拠していた。「空気、水、環境について」の前置きに目を通すと、ヒポクラテスの医学

思想が、ここにいう「大いなる本性」という哲学的見解にどのようなように依拠していたか、は一目瞭然にちがいない。そこには、こう記されていたからである、「医学を正しく修めたいなら、次のように努めなくてはならない。まず第一に、一年の各季節がもつ特定効果を極めることだ。それぞれの季節は決して同じでなく、互いに——それ自体でも移り行きでも——異なっているのだから。次には、温かい風と冷たい風を極めることだが、それというのも、これらがまず、あまねく人間に強い影響を及ぼすからで、さらには、地域によつて異なつてもいるからだ。第三に極めるべきは、異なつた水がもたらす効果であるうか。水によつて味わいと重さが異なるように、効果の点でも差が認められるからだ。いやしくも医者たるもの、見知らぬ町を訪れた際には、つねに——ここでも当時の通例に従つて、この人物は「巡回医」に想定されている——町の位置をチェックしなくてはならない。その町が、さまざまな風や日の出に係わつてどんな具合に置かれているか、流れているのがどのような水で、土壌の質はどうなのか、などをわが目で確かめるためだ。その町の氣候が、季節に應じてどのように変化し、さまざまな星辰がいつ昇りいつ沈むか・・・等々を正しく把握できたら、かれは、一年という歳月がどのようにに巡ろうとしているかを告げることができるだろう・・・しかるに、このような態度は「あまりに自然科学風だ」などと考えるなら、心底から反省して、医学をこの上なく助けるのは「天文学」なのだと思ひ知らなくてはならない。人間のあまたの病いは、季節に應じて微妙に変化するのだから」と。このような姿勢で病氣の問題と向き合う人物は、きわめて優れた心の持ち主といつてよい。ここにいう姿勢は、諸々の事物が「大いなる全体」を成していると感知する特有のセンスに基づいていたからである。そのような人間は、病氣自体をその他の諸々から切り離さず、これを吟味する際にも「それ自体だけの特定問題」として扱わない。か

れは、病氣を抱えた人間を眺めるにも着実に曇りなく、当人を、取り巻いているあまねく自然環境——普遍的な法則と固有の特性を具えた——の中に位置づけるのを怠らない。ミレトスの自然哲学の精神は、「神聖な病（つまりは癩癩）について」にみられる記憶に残るセリフにしっかりと語り出されていた。この小論の著者は、次のように観察していたからである、この病は、何ら「神聖」でなく、他の病と同じく「自然の原因」から生じるのだ、と。ここにいう「自然の原因」は、すべからくが神的で、すべからくが人間的といえるだろうか。ピュシスという観念の基礎を置いたのは、ソクラテス以前の哲学の大半であつたが、この観念は、人間の身体的本性をめぐる医学理論に広げて当てはめられ、この上ない成功を収めた。そして、ピュシスの観念を人間の精神的本性に当てはめるその後の企てはすべて、この医学理論を「定型」に仰いでいた。

前五世紀になると、そうした自然哲学と医学の關係に変化の兆しが見えはじめた。医学上の発見——わけでも生理学分野のそれ——は、アナクサゴラスやアポロニアのディオゲネスなどの哲学者に引き継がれたが、同時に、アルクマイオン、エンペドクレス、ヒッポンなど、自身も医者であつた哲学者が登場しはじめたからである。後者はすべて西方世界のギリシア学派に属していた。ここにみる関心の混ざり合ひは、翻つて医学者にも影響を及ぼし、かれらも、哲学者の解き明かした体系のいくばくかを理論の土台に取り込みはじめたが、そのような点は、ヒポクラテスの論文のいくつかですでに観察しておいた。このように、異なつた二つの思想がはじめて接触して互いを肥沃化したのち、双方が、互いの境界を侵し合うという不安定な時期が続いて、医学と哲学のあまねく境界は、解体の危機に晒されることになった。この時期、すなわち、医学は果たして独立学問なのかという疑問符が投げかけられた時代こそ、ギリシアに現存する最初期の医学文献が世に登場した時期なのである。

ここで、医学文献が提示する言語上の問題をごく簡単に吟味しておかなくてはならない。医学文献自体は数多く現存して、書かれた文体系も、後代に伝え残された特有の道筋もともに明白であったから、今日では、これらを生み出したのがコスという小島の有名な医学グループのすぐれた実践と教義であった点は周知の事実となっている。このグループがもつとも影響を及ぼしたのは、前五世紀の後半で、ヒポクラテスという長に率いられてのことであった。この人物はプラトンによって、前四世紀の初頭には——ポリュクリトスやピディアスが造形美術を代表したように——「医学の典型的化身」とされ、さらにはアリストテレスによって「偉大な医師の完全な手本」として引用された。百年後にさえ、このグループは、プラクサゴラスという脈拍の理論を拾え上げた輝かしい人物を長に戴いていた。前五世紀と前四世紀から生き残った医学論文の数々は、欠けた部分のない十全なもので、すべからずヒポクラテスの名を冠され、そのすべてが、しっかりと形全集として「一纏めにして(エン・ブロック)」今に伝えられている。けれども現代の学問は、これらのすべてがただ一人の著者の仕事というわけではない点を明示した。個々の論文は、しばしば互いに矛盾し、激しい場合には、互いを攻撃し合ってもいたからである。そのような点なら、古えも、この主題と取り組む学徒たちによく知られていた。というのもヒポクラテスは、アリストテレスと同じくヘレニズム時代に再生を果たし、ヒポクラテスを研究する学校とアリストテレスを研究する学校は、この時代に成長を遂げて、ギリシア文化が——それに伴って医学が——生き続けたのと同じ寿命をしっかりと保ったからである。この分野については、ヒポクラテスの作品をめぐるガレヌスの学術的な夥しい注釈や、後期のグレコ・ローマン世界から——完全な形にせよ、あるいは断片の形にせよ——今に伝えられているヒポクラテス関連のあまねく辞書や注解の類いから

幾分は知られるが、その技術と知識には、あらためて敬意を表さないわけにはいかない。もつとも、ヒポクラテスの実像ですらあまたのヒポクラテス論文から抽出できないわけではない、という揺るぎない確信まで共有はできないけれども……。現代の批評家たちも、全集からいくつかの作品を取り出して、これらこそヒポクラテスの真作にほかならない、と訴えてきたが、そうした作品はほとんど数を減らしていったし、なかんずく、それぞれの学者が——全集に提示されたあまたの医学思想から——どの線のものをも「ヒポクラテス当人の特性」と捉えるかに応じて、かなりバラついていった。かくして、この手の研究が勤勉かつ詳細にくり広げられたにもかかわらず、どうやら説明は諦めるほかになく、事の真相への無知が、むしろ正直に告白されてしかるべきかもしれない。その一方で、このように「ヒポクラテスの名を冠された」論文はあまた目にされ、ゆえに学者たちは、ヒポクラテスの実像を求める過程で、心ならずも、ギリシア思想の古典時代における「医学像」をいつそう詳しく作り上げることになった。輪郭的に明瞭な医学の姿は、途方もなく面白い景観を呈していた。提示されたのは、単なる一個の教義体系というよりは、あまねく枝分かれと相互の葛藤を携えた「科学の生命そのもの」だったからである。今日のわれわれが手にしている全集は、当時の書店で販売されていたヒポクラテスの「全集」と違って、前三世紀のアレクサンドリアの学者たちが、ヒポクラテスの作品を——他の古典期の著者たちの作品と同じく——後世にまで伝え残そうと懸命に励むなかで、コス島の医学校の古文書保管庫でみつけた古い医学文献の全集であった点も段々と明らかになってきた。そのような全集は、明らかに、修正を加えられていなければ、異質の事柄を捨て去ってもいなかった。或るものは、文献として出版されるか、少なくとも出版を意図して書かれ、或るものは、元々の原稿を書き写したにすぎず、或るものは、広く

民衆に読んでもらうのではなく、著者の同僚たちに貴重な情報を提供するべくまとめられた「記録」であった。さらに或るものは、コスの学校で書かれてもいなかった——これも無理からぬことで、いやしくも科学者連中が他の人たちの発想や発見に関心を払わなかったら、科学もすぐに行き詰ったであろう——。そのような異質の作品の数々が、学校の保管庫に収納され、学校自体が非個人的な施設であった事情も手伝って、師の作品が弟子たちのそれに混ぜ合わされ、メンバーはいずれも、同僚たちの見解に精通していた。同じような事情は、プラトンやアリストテレスといった人物の全集にも目にされるのではないだろうか。両人とも、ヒポクラテスより小規模ながら、やはり、偉大な哲学学校の長を務めていたからである。

ヒポクラテスの学校に受け容れられた面々はすべからず「ヒポクラテスの誓い」を遵守しなくてはならなかったが、そこには、さまざまの厳粛な規定があつて、その一つにはこう記されていた、学ばれた中身は口外してはならない、と。医学の知識は、普通には、息子が父の職を継いだ時点で後者から伝授され、肉親ならぬ他人が「弟子」として受け容れられたら、当人は「師の息子」となつて、みずからの技術を師の実子たちに「無報酬」で教えます、と固く誓つた。とはいへ一般には、師の実践を引き継ぐにあたり、職人階級の徒弟に倣つて、どうやら師の娘と結婚したらしい。こう述べられていたからである、ポリュボスという医師はヒポクラテスの婿であつた、云々と。この人物はたまたま、アリストテレスによつてその名が引用されたコスの学校の唯一のメンバーで、アリストテレスは、この医師の手になる静脈組織の詳しい記述に言い及んでいた。その記述は、ヒポクラテス全集のわけでも有名な作品の一つとして今も現存し、ここから、全集の性格もおのずと浮かび上がってきた。ヒポクラテスの時代、偉大な個々の人格がいかに強力な作用を及ぼした

かは——詩や芸術のはるかに初期の段階や、哲学の最初期にそうあつたように——医学でも徐々に実感されはじめたが、医者という専門職の法的連帯はなおも強大無比で、専門的実践に関わつた発想や教義が、それらを生み出した当人のものとされる実例は皆無に近かつた。医学を探求する面々が、みずからの名で個人的見解を述べ伝えたのは、はっきりした証拠に基づくなら「公の講義」においてであつた。そのような講義のいくばくかは、ヒポクラテス全集になおも目にされるが、著者の名は知るすべもない。ヒポクラテスの論文中には、他の学校のものと同様の業績——いつそう古くて同様に有名な小アジアの医学校で用いられていた「クニドス学派の教義」など——も引用されているが、だからといって、現存するしかじかの論文はコス以外の特定の学校の特徴を示している、と証明して成功した学者など、今に至るまで一人として見当たらない。前五世紀の終わりに、個々人は、みずからの見解を表明する大幅な自由を手にしたから、コスの学校で奉じられた理論から逸れたものはすべからず他の学校の教義とみなされてよい、などと主張して「まづとう」なはずがない。しかも、これまでの百年にわたる研究によつて、クニドスを中心を置いたアジア系の学校と、シケリアを中心を置いた西方ギリシア系の学校の二つが存在したこともすでに判明している。もつとも、双方で為された業績をめぐるわれわれの知識は、しつかりした証拠を欠くため、きわめて断片的に留まるほかはないけれども……

医学文献は、ギリシアの精神史における「新機軸」であつた。そのような文献は、教えることを——それも直接に教えることを——意図していたとはいへ、哲学や詩と違つて、普通の一般人にほとんど語り掛けなかつたからである。これの登場によつて、今日ますます強く実感されつつある「歴史的趨勢」が例示された。ほかでもない、生活はますます専門化し、知識はひたすら分化して部門的となり、これらに与かれるの

は高度に知的で道徳的な資質を具えた、ほんの一握りの特別に訓練された人士を措いてなくなったが、このような趨勢がそれ、なのである。医学文献の著者たちは、意義深いことに、しばしば「一般のシロウト」と「専門のクロウト」について口にした。この区分は以後に、長くて重要な歴史を刻んだが、われわれの目に触れた最初はこの時点なのである。「一般のシロウト」という現代の言葉は中世の教会で産声を上げ、はじめは「聖なる秩序（＝教会）に属さない人間」を意味したが、その後「専門職の秘事に与からない人間」を指すようになった。これに対して「イデオーターズ（＝シロウト）」というギリシア語には、社会的・政治的な意味がしっかりと含まれ、これが指し示したのは、国家や共同体に関心も払わず、もっぱら、私事にのみ意を用いる輩なのである。このような人間に比べると、医者とは「デーミウールゴス（＝クロウト）」と呼ばれるほかはない。かれは、いうところの「国土」であって、広く民衆のために靴や用具を拵えるあまたの職人連中も、こう称されていた。一般のシロウトは、しばしば医者から区分され、ここにみた光に翳して普通は「大衆（デーモータイ）」と呼ばれた。対して「デーミウールゴス」という名は、医者という職業がもつ二つの要素——社会的局面と技術的局面——を合わせ持っていた。ちなみに、これの同意語として用いられた「ケイローナックス」という難解なイオニア語は、後者の局面しか持ち合わせていない。高度な技術を身に付けたギリシアの医者は、同様に高度な技術を身に付けた職人一般から区分される謂れはなく、これは、もつと広く彫刻家や画家にも当てはまるにちがいない。「シロウト」という言葉は、われわれの用法では「手ほどきを受けていない」という内実を伴っていたが、ギリシアの医学でも同じであった。ヒポクラテスの規定の麗々しい締め括りは、次のようになっていて、「さまざまな秘事は、手ほどきを受けた人士にのみ開示される。いまだ知識の秘儀に与かってもない

穢れた身」への開示は、固く慎まれてしかなるべきなのだ」と。ここにみられるのは、世の人間を、あたかも宗教儀式を経てのように二つの階層に区分し、片方を、奥義型の知識から締め出す構図にちがいない。そこに描かれた思想は、医者的重要性を、技術的な意味でも社会的な意味でも単なる職人の重要性より上に位置づけたが、それ以上に、医者という職業がいかに気高く、みずからの義務をどんなに深く自覚していたか、をこの上なく能弁に証言していた。これをまとめたのは、たとえヒポクラテス当人でなかったとしても、おそらく、みずからの職業がいや増す自然の知識から何を手に入れたか、を存分に自覚できた人物に違いない。そこに明示されていたのは、孤立しながらも高邁な自負に溢れた「医師」という新しいタイプが、社会という枠組みの中に自身を位置づけるにいたり、いかに生々しい困難を覚えていたか、だったからである。

実際にはしかし、医学という新しい学問は、ギリシアにおける一般の知的生活からそう鋭く区切られていたわけではない。この学問は、みずからの場所を「そこ（＝一般の知的生活）」に確立しようとひたすらに汗を流した。医学が築き上げられたのは特別な知識分野で、それゆえ一般民衆から切り離されていたが、この学問は、そうした知識を民衆に分ち与え、しっかりと理解してもらえ具体的な方法や手段を見つけ出そうと意識的に努めた。ここから生まれたのが、医学への門外漢に近い読者たちを対象とした特別な医学文献で、それは、より狭い専門家向けの論文と、もつと広く一般民衆用の論文に分かれたが、双方ともにいくばくかは、われわれの手元に残されている。もつとも、残された作品のほとんどは前者に属し、これらを——ふさわしい形で——存分に扱うのは控えておこう。われわれの関心は、当然ながら後者に向けられてよい。後者は、文献的な質の点で前者よりも優れ、なおかつ、あまねくギリシア人が「バイディア」と称したものの一部だったからである。医学者た

ちが、みずからの問題を——ソフィストにみられた「講演（エピソード）の形や、読んでもらうために書かれた「演説（ロゴイ）」の形を併用して——民衆の前に提示したとき、そのような事柄に、果たして「イデオローテース」がどれほどの関心を払うかなど誰にも分からなかった。諸国を巡りながら講演をくり広げるソフィストとの「競い合い」を買って出たとき、医者たちが腐心したのは、公的な信望と威信をいかに手に入れるかであったが、かれらの知的な評判はかなりのもので、ために、扱われているテーマへの大まかな関心が広く呼び覚まされ、「医学好きの民衆」すら誕生した。かれらは「医学的な教養に溢れた」人びとから構成され、医学の諸問題に——たとえ専門的とはいわないまでも——特別な関心を払ったから、そのようなテーマに何らの意見も持ち合わさない「一般大衆」から区分された。前者には、ここでの問題に判定を下す資格が具わっていたからである。医者は、さまざまな機会を活かしてこの種の民衆に医学的な発想を紹介したが、いうまでもなく、実際に患者を治療する場面にまさる好機はなかった。プラトンの『法律』には、奴隷を相手にした医者として、学問的に正しく鍛えられて自由人の治療に携わる医師の違いが、楽しげに描き出されている。かれの言葉に耳を傾けるなら、その差は、みずからの患者を扱う態度にあった。前者は、病人の横たわる寝床から寝床へと走り回り、論じ合うこともなく（アネウ・ロゴウ）——すなわち施す処置について説明もしないで——ただ処方と命令のみを与え、お定まりの手順とそれまでの体験に則って汗を流した。かれは「絶対的な暴君」に異ならない。対して後者は、学問的な教えによく似た仕方（トゥー・ピロソペイン・エンギュス）自由人の患者に語りかけ、身体の本性に立ち戻って病気の源を特定した。それを前者が耳にしたら、腹の底から大笑いして、大半の「世の医者」が言い返すセリフを口にするにちがいない、「なんと愚劣なことよ。お前は、患

者を「治す」のではなく「教育している」のだから。それでは、当人を健康体にするよりは、医者にしたいと望んでいるに等しいではないか」と。プラトンはしかし、ここにも「患者を抜本的に教育する」という姿勢に基づいた医学的処置こそ、科学的治療の正銘の理想にはかならない、と信じて疑わない。このような見解が引き継がれた「先」は当時の医学であった。ヒポクラテス全集には、医師の抱える問題をシロウトに広く知ってもらう最善の方法は何か、をめぐる論議がいくつか目にされて、「古い医学について」の著者もこう漏らしていた、「この技術（＝医療）について語る際にわけでも必要なのは、シロウトにも理解できるように語ることなのだ」と。そのための糸口は、人びとが実際に患った病気でなくてはならない。かれらは、文字通りのシロウトで、みずからの病気の原因や処置の諸々を本当の意味で理解できないかもしれないが、それでも、そうした中身をすべからず説明し、当人の実体験をまざまざと思い出してもらうだけなら難しいわけではない。この著者の言葉にもあるように、もしも医師の口にしたところが患者の思い出した中身と一致するなら、これ自体、医師の技術の正しさを証しているのである。

この著者が、シロウトにどう教えたらいかを論じ、あるいは、そうした連中に直接に語り掛けた箇所はあまたあるが、すべてを引用するには及ぶまい。患者の実体験から選り出された情報に訴えて帰納的に事を進め、患者をサポートする——このような著者の計画に、すべての医者が同調したわけではない。同調しなかった面々は、異なった見解を携えていたのか、はたまた異なった状況下にあったのか、真反対のことを実施した。すなわち、「人間の本性について」の著者のように、シロウトの聴衆を相手に病気の本性をめぐり一般理論を練り上げたり、はたまた「技術について」の著者のように、そもそも医学は「真の技術」なのか否かの判定までシロウトの民衆に奨めたのだった。たとえば、プラトンの『饗

『宴』に登場する医者のエリユクシマコスにこれに相当するだろうか。これは晩餐ののち、エロースの本性をめぐって医学と自然哲学の見地からシロウトを相手に、長くて機知に富んだ演説をくり広げたからである。教養ある人びとのサークルでは、こうした話題（『エロース』）に特別な関心が寄せられ、しかも、当時に流行の自然哲学と結び付いたことも手伝って盛んに論じられた。クセノポンも、のちにソクラテスの熱心な信奉者となった若いエウチュデモスの姿を借りて、医学のシロウト愛好家」という新しいタイプの実態をありありと描いている。この若者の関心は、知的な側面に限られ、建築学、幾何学、天文学、わけでも医学に関わる作品群を網羅したあまねく蔵書をすでに買い集めていた。ペロポネソス戦争中の悲惨な疫病体験が、多大な医学文献を世に送り出してどれほど熱心に民衆間で愛読されたか——この事情は、容易に理解できるにちがいない。トゥキユデイスは、シロウトの医学愛好家として、疫病の原因をめぐって互いに矛盾し合う仮説が溢れていた実情に促され、有名な『病気の兆候』の箇所をまとめ上げた。そこでは、病気の源を示唆する試みは意識的に避けられていたが、ざっと目を通したら、当人が、この主題に関わる医学文献をいかに綿密に研究していたかは——用いられた術語の端々からも——読み取れるのではないだろうか。

アリストテレスは、みずからの『動物部分論』を始めるにあたり、こう口にしていた、「あまねく学びには、貴賤を問わず、二つの姿勢が指摘されてよい。一つは、学問的知識の名に値するもので、他の一つは、いわゆる教養（バイディア）の姿勢である。後者の中身は、教養ある人間か否かを決定する『指標』に着目してもらえば明白だろう。自分以外の者の説明内容が本当に正しいのか否か、を正しく判定できること——これを措いて教養ある人間の『決め手』はないからである。そしてこれが、われわれの考える『一般教養を具えた人間』で、教養とは、このように

出来ることにほかならない。『すべての事柄』に独力で判断が下せるのは、われわれの考えるところ、教養ある人間を措いてなく、それ以外の人間は、単に『特定の分野』でそうできるにすぎない。特定の分野でも、われわれの記述した普遍タイプの教養人に対応して、特定タイプの教養人が目にされてしかるべきなのだから」と。かれはさらに『政治学』でも、自然を専門的に研究するプロの学徒と、シロウトの愛好家としてこれに関心を寄せる教養人を同様に区分しているが、これこそ、アリストテレスの強調したい点であった。そこでは、さらに詳しく、開業医の実践的知識、創造的な医学研究に携わって自身の発見を世の医者たちに広く告げ知らせる学究の徒の専門的知識、医学的な教養を積んだ人士の教養的知識、といった等級を異にする三つの知識にも言及されていたが、アリストテレスは、いかなる特定分野にせよ、この手のシロウト愛好家は目にされるものと付言するのを忘れない。ならばかれは、このような実例に訴えて何を証明しようとしていたのか。もちろん、政治問題に判定を下す権利を手に行っているのは、現実の政治家ばかりでなく、政治的な教養を積んだ人びともそうなのだ、以外にありえない。ともあれ、そのような実例として選ばれたのは『医学』で、ここからも、こうしたタイプ分けが医学分野でかなりポピュラーであったのは、しっかりと証明されるにちがいない。

ある分野を専門的に極めるプロの学究と、あくまでも一般教養の一部としてこれに関心を寄せる教養人——このような区分は、以前にも目にされていた。たとえばアテナイの若い貴族たちがそうで、かれらは、ソフィストの講義に熱心に参列したが、かといって、職業的なソフィストになるのは望まなかった。ソフィストの講義に耳を傾けとりわけ熱狂的な人士といえども、その傾聴は、どれほど精神的なレベルに限定されていたことか——これを、洒落た形で提示したのは『プロタゴラス』に

おけるプラトンであつた。そして、クセノポンの描くエウチデモスは、医学分野における類例にほかならない。この人物は、あまたの医学書を熱心に読み漁つたが、ソクラテスからこう問われて動揺を隠せなかったからである、ならば君は、専門の医者になりたいわけなのかね、と。エウチデモスの蔵書はさまざまな分野に及んでいて、そうした関心の多彩さは、新しい「一般教養」の特徴をしつかりと浮かび上がらせていた。クセノポンは、エウチデモスとの会話を記すにあたり、「ソクラテスにみる教養への姿勢」という特別な表題を付し、ここからも、いくつかのサークルで「パイディア」という言葉がしだいに「一般教養」の意味を持ちはじめたのが、明らかになるにちがいない。ここではしかし、為されるべきは、ある特定分野の教養の発展を詳しく跡付けることなく、教養がみせる顕現の多彩さをすべからず記述することなのである。さまざまな教養の中でもとりわけ重要な一つは「医学的教養」にちがいない。医学ないし自然科学の分野での教養人について、アリストテレスの解き明かすところは、プラトンやクセノポンに比べてもつと明白で、かれは、このような教養人はまともな判断を下すことができる、と語っているが、その意味は、教養人たるもの、問題をめぐる真実のすべてに精通しているわけではないが、問題を攻略する正しい仕方はしっかりと頭に描いている、なのである。問題をめぐる真実のすべてに精通しているのは、学問的な探求に専心する学究に狭く限られざるを得ない。これに対して教養人が手にするのは、まともな判断を下す能力でしかないが、かれの嗅覚の鋭さは、時として専門分野の創造的な学者のそれより、もつと信頼に足る場合がないわけではない。純然たるプロの専門家と純然たるアマの門外漢の「中間」に位置するこの新しいタイプの登場は、ソフィストの時代をへたギリシアの文化史を特徴づける顕著な現象といつてよいが、それも当然だ——アリストテレスはこう考えて憚らない。新たなタ

イプの登場がわけても目にされるのは、初期の医学文献を描いてない。そこでは、広く世の人びとを「医学鼻祖」に改宗させるべく、膨大なエネルギーが投入されていたからである。特定の学問を一般教養に参入させるか否かには、つねに、強固な社会基準が制約を加えていた。すなわち、一流の人士が知るにふさわしいものしか許可してはならない、がそれである。あまりの専門的傾斜（アクリベア）は、自由な教養と真のカロカガティア（卓越性）に和合できない、という倫理的格言にはアリストテレスでもお目にかかるが、かれは、教養の展開にこの上なく重要な結論をこの格言から紡ぎ出していた。およそこのように、専門的学問が勝ちを征した時代にも、古い貴族的教養は、なおもその頭を誇らし気にそびえ立たせ、その程度たるや、とくとご覧いただきたい！

ギリシアで「医者（の術）」と呼ばれていたものに初めてお目にかかるのは、最初期の医学文献においてで、このことは、われわれの記述した「民衆」がどうしたものであつたか、への関心を掻き立てずには措かなかつた。また、自然哲学が医学に及ぼした影響を再現し、前者が後者をどのように一変させたかを理解するにあたり、思い浮かべられたのは、ヒポクラテスの時代の「医の科学者たち」が用いた標準の科学思想であつた。ともあれ、これらを成し遂げて、医学における目下の形態と原初のそれの「裂け目」を理解するには、かなりの歴史的想像力が求められなくてはならない。加えて、前五世紀における医学の高次の発展は、何らの説明も要しない事実ながら、そう仮定しないとすれば、ここでの理解に、さらなる努力が求められるにちがいない。もつとも実際には、そう仮定されてしかるべきで、当時の医学的発想のかなり多くが今日でも通用し、医学の細部での改良もつい最近である点を考え合わせると、わけてもそうだろう。ギリシア医学の歴史は、医学文献からも知られるように、自然哲学の理論がすべての領野を支配する「状況」に闘いを宣したところ

から始まった。ここにいう闘いは、避けることのできない革命の兆しで、この革命は、あまねく意図や目標の類いをすべての領野から締め出した。それ以後の医学が自身の土台に据えたのは、それゆえ、次のような知識であった。すなわち有機体は、自然の普遍的なプロセスと人間の身体生活の底に共通して横たわる諸力のはたらきに——正常な状況下でも異常な状況下でも——さまざまに反応したが、そうした反応を司る諸々の法則の知識が、それぞれである。このように揺るぎない出発点が確立されるや、そこを起点に、さまざまな方向に動き出るのは容易かった。ギリシア精神は、生来の目的志向性と徹底性と論理性に訴えて、あまねく知識の道を探索するべく、体験に許されるかぎりの遠方まで足を運んだ。自然哲学の偉大な観念が医学に引き継がれたとき、一緒に、この哲学の宇宙論的発想も入り込んで人びとの精神を掻き乱したが、これも、自然の成り行きというほかはない。

のちの自然哲学者たちは、エンペドクレスのように、数々の障壁を突破して医学的な発想をみずからの意図に織り合せる術（「総合」を身に付けていたが、そうした点はすでに観察しておいた。ここにみる総合は、エンペドクレスにみる総合——経験主義的な自然哲学と宗教的な預言者性の合体——に異ならない。この人物は、開業医として成功を収め、医学的な教えの威信も高かったにちがいない。かれの提唱したこの世の万物は地・水・火・風の四元からなる」という哲学理論は、暖・冷・乾・湿の四基質論として、何世紀にも及んで連綿と医学に生き続けた。この四元論は、奇妙なことに、わけでも有力な医学上の「四体液」論と合体するか、はたまた、あまねくライバルの異論をことごとく追い出して、医学理論が依拠すべき唯一の基盤となった。こうした実例が紹介するのは、哲学的な発想がどうした道筋を辿って医学に押し入ったか、そして、この発想に対する医学の反応がどれほど多彩であったか、にちが

いない。或る学者は、それらのすべてを受け容れて、即座に、暖・冷・乾・湿の四基質を用いて思索し、他の学者は、この四元論をすでに存在する四体液論に接ぎ木して双方を織り合わせ、また或る学者は、これを無益なもの、あるいは、医者にとって副次的な関心物でしかないものと考えて退けたからである。これを介して、医者という職業がいかに知的に俊敏で、自然の知識をめぐる新たな進展のすべてをいかにしっかりと自覚していたか、が照らし出されてくるにちがいない。当時の医者たちは、医学的な現象を説明づけようと、いまだ十分に検証されていない理論まで用いて憚らなかったが、その性急さも、ギリシア精神に特有の「勇み足」だったかもしれない。とはいえ勇み足は、部分的な原因でしかなく、主たる原因は、当人たちの経験不足にあったといつてよい。生理学と病理学の分野で、理論的な推論はいまだ揺籃期に留まっていた。ゆえに、あまりに大胆であったり、過度の図式化傾向を示したからといって、あされるよりはむしろ、ギリシアの医者に顕著な迅速さと着実に、いつその驚きが覚えられてしかるべきかもしれない。病人の治療を第一の目的とし、この標的から常に目を逸らさなかった当人は、だからこそ、非実用的な省察からわが身を守り、知識のリアルな前進にその道を開いておいたからである。

医学は、自然哲学に助けられて段々と上り詰め、ついには「学問」に至ったが、今や、慎重な経験主義と、個々の特定事例に必要なものは何かの詳細な観察に立ち戻って、あまねく自然哲学から独立した「技術」として区画され、とうとう真の自己になることができた——あふれる確信を込めてこう主張したのは、「古い医学について」の無名の著者であった。もつとも、当人のみがそう主張したわけもなく、かれは、いわゆる「学派」の声を代弁したにすぎない。ここにいう学派とは——当の論文をまとめたのがヒポクラテス自身にせよ、はたまた他者にせよ——あの

ヒポクラテス学派にほかならず、それゆえ、コス島の学派の手で医学は「独立の学問」として創設された、と考えられてよい。医学は、長きに亘って正銘のリアルな技術であり、今さら新たな「仮説」など必要としない——これが、この論文の著者の掲げる命題であった。あまたの医者の中には、世の哲学者たちが理論にみせる態度に学んで、真の技術（テクネー）である所以は、単一の原理をしつかりと携え、これに照らして個々の現象をすべからず眺めることなのだ、と信じて疑わない輩もいたけれども、かれは、こうした連中に賛成の一票を投じない。そのような信念は医者の手から、病氣の原因を特定する際の非学問的な「優柔不断」を——一般に想像されるのとは逆に——取り去りもしないし、あまねく患者に正しい治療を保証する度合いも少ないにちがいない、と考えるからである。この信念は、治療の術がこれまで足掛かりにしてきた「経験」という確かな足場を捨て、あいまいな理論に与することをもっぱらに意味した。哲学が、躓きながらも手探りで進む「未知なる仄暗い領域」では、そうした理論に寄り掛かるのも一応の道であるが、ここに踏み込むと医者は、何世紀も前からの、ゆつくりした、骨の折れる、着実な歩みの中で医学的経験が手にしてきたすべてを打ち捨てなくてはならない。ここでの「歩み」をしみじみと読者に訴えるべく選ばれたのは、何を食し何を飲すべきかを正しく告げるのが医者なのだ、という旧来の発想であった。長い体験を介して一步一步、世の人びとは、動物のエサとは異なった食物まで口にし、さまざまな食物を区分する術を学んだが、医者は、さらに高い段階にあつて、病人のために特定の食物を処方できた。動物のエサが健康人に危険なように、健康人の食物も、同じく病人に危険であつた以上は……

このような一歩によって、医学は、はじめて「真の技術（テクネー）」に至り着いた。医学に用いられるテクネーは、それゆえ、料理のような

「熟練」には用いられない。さて、各人は「みずからに適した」ものを摂取しなくてはならない、という栄養の原理は、健康人にも病人にも当てはまったが、その際の「適した」は、食物の「質」に加えて「量」にも及んだ。すなわち、重い食物は軽い食物と区分されなくてはならない、に加えて、食べる量も特定されるべきで、それは、体質や体格に応じて異なる、も含意したのである。病人は、あまりに食が太くてもダメージを負うが、あまりに細くてもやはりダメージを負う。或る医者が本物か否かを確かめるには、個々のケースに何が適切かを正しく査定する「能力」に目を向けるほかはない。誰に対しても正しい分量を選び取れる確かな判断の持ち主——これが、本物なのである。とはいえ、それに基づいて適量を「一般に」特定できる重量基準ないし尺度はこの世に見当たらず、適量の特定は「勘（アイステシス）」に頼るほかはない。勘こそは、先にみた合理的基準の欠落を埋める唯一のものといつてよい。開業医の犯す過ちの大半はこの点（「勘の拙劣」）にあつて、それゆえ、時たま小さな過ちしか犯さない者は、かれの職業では「巨匠」と称されてよいだろう。大半の医者は「下手な水先案内人」に酷似する。天候に問題がないかぎり、未熟さも人目を引かないが、ひどい嵐に遭遇すると、とたんに無能ぶりが露見するからである。

「古い医学について」の著者は、あまねく「一般化」に対抗の姿勢をとっている。かれは、幾人かの「医者やソフィスト」の主張に異議を申し立てた。かれらは、こう訴えたからである。もしも人間とは何で、どのように生まれ、こうした素材から造られているか、が分からなければ「医学」など理解できようはずもない、と。これは、理論の上でなるほど正しく、誰もが経験主義に満足していたら、今日の医化学など生み出されなかったにちがいない。かれの疑念はしかし、当時に入手できた原初の四元論のおかげで正当化された。「かれらの理論は、エンペドクレスや

その他、自然についてまとめた面々と同じく、あまりに哲学に走りすぎているからである。だからといってかれは、エンペドクレス当人を攻撃している——この言葉は通常そう理解されていた——のでなく、あえて「エンペドクレスやその他、自然についてまとめた面々と同じく」と付け加えて「哲学」の中身を規定した。そして、論敵の流す汗に対処しつつ、医学を、自然哲学の高い（と思われる）位階にまで嵩上げするべく、誇らし気にこう口にした、「自然の正確な知識を手に入れようとすれば、わたしの信じるところでは、医学を介する以外に道はない」と。この言葉は、われわれの耳に奇異に響くかもしれないが、かれの時代には適切で正鵠も射っていた。自然を探索する人びとは、いまだ「正確への義務」を学び取らず、一つの自然の学として、他のあまねく学に先立ってそれを学び取ったのが「医学」であった。医学の分野では、成功はもっぱら細部の正確な観察に依存し、失敗は、人間存在の生命を左右したからである。人間について問われてよいのは、それ自体として何なのかでなく、「何を食して何を飲み、どのように生き、そうしたすべてがいかなる影響を及ぼしているか」なのである——われわれの著者が「中心問題」とみるのは、これを措いてない。かれは、世の医者にこう警告した、「チーズは重い食物だ、あまりに食し過ぎると身体を壊してしまうのだから」と語っただけで問題が十分に解決された、などと信じてはならない。かれ自身が願うのは、チーズがどのように身体を壊すのか、それはなぜなのか、人間の身体の中の部分がチーズに耐えられないのか、等々を詳しく知ることなのである。ともあれ、チーズの効用は人によって異なり、一口に「重い食物」と言っても、その「重さ」にはさまざまな理由がある。だから医学では、「人間の本性」一般について口にするほど愚かなことはない。

「慎重に一步退く」といった、ここにみられる経験的な留保の姿勢は、

医学における新しい流れの特徴でもあったが、その背後に、果たして何があったのだろうか。「エピソード（流行病…訪れるもの）」と称される七冊の作品は、これを照らし出してくれるのではないか。これらの作品は、大半が事例報告で、その中身は、島嶼やギリシア本土の北方を中心とした長期にわたる医学実践（と思われるもの）であった。それぞれの事例は、時に、患者の名や出身地で区分されたが、端的に目にされるのは、個々の開業医たちの体験がどのように成長して「医学」という強力な構造——ヒポクラテス全集も証言するような——を築き上げたか、にちがいない。これらの「覚え書き（ヒュポムネーマタ）」の様式は、医者たちがそれに依拠して行爲した、しかも、アリストテレスの作品で改めて出会われる「規則」を例証していた。すなわち、われわれの体験は、記憶に助けられつつ感覚的知覚から生じる、という・・・

ここに挙げた「流行病」という作品は、明らかに、複数の観察者の手でまとめられ、「人生は短く、技術は長い。好機はすぐに通る過ぎ、実験は物騒で、判断は難しい」という有名な文章を収録し、ヒポクラテスの金言の拠点となっていた。たとえば——もしも本物の学徒なら、諸々の細目を等閑になど付さないだろうが、囚われることはない。真理は、無限に多彩な個々のケースに解消されない。されたとすれば、真理などリアルな意味を持たないだろう、等々。当時の医学の思索家たちは、これに促されて、人間本性の、身体構造の、気質の、病気その他の「型（エイデー）」という観念に至った。ここにいう「エイドス」は、まず第一に「形」を、次いで、個物の特定集団を他の集団から区分する目に見える「しるし」を意味したが、これは直ちに拡張され、多彩な類縁の現象群に共通した区画的特徴を指すようになり、つまるところ——わけても複数の形で——「型」ないし「類」の意味を手に入れた。この程度の一般化なら、「古い医学について」の著者もあえて拒まなかったろうが、ソクラ

テス以前の哲学者たちにみる「熱こそは自然の原理で、あまねく健康と病気を司る」といった特有の断定となると、あくまでも拒んだ。かれに従うなら、人間には塩味、辛味、甘味、渋味、その他無数の「味」が内在し、異なった作用を及ぼしている。もしも混ぜ合わされて単独で現われないなら、さほどの害も及ぼさないが、どれか一つが切り離されるや、とたんに有害となる……。これは、クロトンのアルクマイオンが口にした古い教義に異ならない。かれはこう語っていたからである、有機体中の「力」の一つが支配的になる（ムーナルキエー）と病気を引き起こし、それらの力が均衡を保つ（イソノミエー）と健康を生み出すのだ、と。しかるに「古い医学について」の著者は、暖・冷・乾・湿の四基質論も、さらには、のちに——わけてもガレヌス以後——ヒポクラテス医学の基盤とみなされた有名な四体液（血液、粘液、黄胆汁、黒胆汁）論もともに顧みなかった。この点でかれは、「人間の本性について」をまとめた図式型の教義論者——かつてはヒポクラテス当人もみられた——の真反対に位置している。

「古い医学について」の著者は、当時イメージされていた「哲学」に異を唱え、さらには、近視眼的な経験主義者たちにも一撃を加えて、わざと立腹を誘っているようにも見受けられたが、その手で切り開かれた新しい哲学的探求の多さには、心底から驚かないわけにはいかない。当人は、みずから「ソフィスト」と呼ばれようとは思ってもいなかったろうが、そう呼ばれていたのを知っていた印象は拭いがたい。実のところ、医学史の研究に勤しむ今日の文献学者たちは、通常、かれに倣ってこう考えていた、哲学的なタイプの医者は、この著者のような経験主義的な科学者の対極に位置している、と。前者の頭は、壮大な宇宙論にあふれ、その舌は、ソクラテス以前の自然哲学者たちの作品から借り受けた偉大で気高い言葉に満ち満ちている、というわけである。イメージさ

れているのは、要するに、ある時にはヘラクレイトスの口調で語り、ある時にはアナクサゴラスやエンペドクレスの口調で語る、「食養生について」という四冊本の著者のような人物にほかならない。医学は、哲学思想の新しい領域を切り開いたが、それは、少なからぬ医者たちが「出来合い」の本性論を用いたからではなく、わけても有能な医学生たちが、真に創造的な、コロンプスに似た航海の途上で「本性」を発見したからにちがいない。かれらが手を染めたのは、以前には誰ひとり、そんなにも親密にそんなにも共感を込めて——あるいは、そこでの特定法則にそんなにも十分な理解をもって——探求したことのない「領域」であった。

すでに紹介しておいたように、プラトンは、確かな本能に訴えて、はじめから医学との接触を密にしていた。ここでは、双方の結びつきをもっと詳しく説明しておこう。医学の新しい方法と概念を例示するのに、医学が、プラトンとアリストテレスの哲学にどうした影響を及ぼしたか、にまさる実例はなかったからである。医学を研究する今一つの有力な理由は、医学が、バイディアの中心問題は何なのか、を提示してくれるからにほかならない。プラトンが、みずからの「倫理と政治の学」を築き上げたとき、この学のモデルに仰がれたのは、数学的な知識でも思弁的な自然哲学でもなく——『ゴルギアス』やその他の多くの作品も伝えていたように——まさしく「医学」であって、これは、単なる偶然のしからしめるところではない。『ゴルギアス』でかれは、真のテクネーの本質（と自身が考えるところ）を説明するにあたり、医学をモデルに挙げて、真のテクネーに顕著な特性を取り出した。テクネーとは、それが扱う対象の本性に関する知識で、この知識は「人間への裨益」を狙いとし、ゆえに、実行に移されるまで不完全に留まっている。今、プラトンに従って、これを医学に当てはめると、こうなるだろうか——医者とは、病気を

「病氣」と認知できる人物を描いてないが、それは、病氣とは真反対の「健康」に関する知識を携えているからで、ゆえに、病氣に陥った部分を正規の状態に戻す方法と手段を見出しうるからにはかならない、と。これこそ、プラトンが考える哲学者のモデルで、哲学者たるもの、世の医者が人間の身体とその健康に意を払うのと同じく、人間の魂とその健康に意を払わなくてはならない。「魂の治癒」を目ざすプラトンの学と、「身体の治癒」を目ざす医者らの学をこのように対比すると、双方が共通して具える二つの特徴も蘇って、存分に説明されるのではないだろうか。双方の知識は、ともに、判断の土台を本性の客観的知識に仰いでいた。一方の医者は、身体の本性の洞察に励み、他方の哲学者は、魂（プシユケー）の本性の理解に励んだからである。各々は、特定の本性領域をそれぞれに探求したが、それは、本性を「一連の事実」として扱ったからでなく、哲学者や教師の行為と医者のを共に規定している指導原理は、魂ないし身体の生来の構造中に見い出されると予想したからにほかならない。医者が、身体的生存の規範に据えるのは「健康」を描いてない。そして、プラトンの倫理・政治的な教えが異様な迫力で人間の魂に食い込んでくるのも、魂的生存の規範を「健康」と称しているからなのである。

『ゴルギアス』でプラトンは、医学に関心を寄せているが、その矛先はもっぱら、真のテクネーの様式と内容をめぐる論議に向けられていた。医学には、これとは別の重要な箇所——つまりは『パイドロス』——でも口にされ、そこでは、技術の本性よりは「医者」の具体的手法」に的も絞られていたが、ここでの主張は、真のレトリックの手法に仰がれるべきは医学を描いてない、なのである。真のレトリックとは——先の『ゴルギアス』と同じく——プラトン当人の「政治哲学の術」を意味し、これに導かれて、人びとは最善なものに至ることができた。プラトンは、

バイディア（そのⅣ）

果たして何を医学の手法における本質的要点と考えていたのだろうか。かれはペリクレスを評して、この人物は強力な雄弁家にして無比の精神的指導者であったが、それは、哲学者のアナクサゴラスから「自然をめぐる大言壮語（アドレスキア）」を学び取ったからだ、と口にした。これを目にした読者たちは、半分はふざけの混じったこの手の初期の見解に迷わされ、時に——わたしの信じるところでは——あらぬ方向に導かれてしまった。『パイドロス』では、こうも主張されている、魂を理解しようとするは「全体の本性から切り離す」ことなどできない、と。この主張は、ヒポクラテスを実例として例証されるにちがいない。ここでの原理は、この人物の手で身体の知識に当てはめられていたからである。世の学者たちは、だから、通常はこう結論した、プラトンがヒポクラテスの名を用いたのは、「古い医学について」の著者が攻撃した「哲学主義者」のような、自然哲学の知識をいくばくかは携えた医者たちの「象徴」としてであった、と。けれども、これに続いてヒポクラテスの手法は詳細かつ正確に記され、それに導かれたら、異なった結論に至り着かないわけにはいかない。われわれの魂を対象にしたレトリックとその技法の「手法」を提供したい——プラトンの主張の意味は、これを描いてなかったからである。この作品のソクラテスは、こう口になっている、ヒポクラテスが教えるのは、ほかでもない、第一に問われるべきは、それについての真の技術を手に入れたいと切に望んでいる対象が、単一の本性を具えているのか、それとも、複数のそれ（ポリュエイデス）を具えているのか、なのであって、もしも本性が単一なら、そうした本性が他とどうした力を及ぼし合わなくてはならないかを探求し、逆に、複数の形（エイデ）を持つなら、それらを数え上げ、それぞれを同じ仕方で探求しなくてはならない。すなわち、それぞれが他とどのように影響し合うかを吟味するわけなのだ、と。

ヒポクラテスの手法をめぐるこうした記述は、*「冷」*を扱うにも、宇宙とその根本因にまで遡ってこれを規定しはじめる哲学主義型の医者には当てはまらない。そのような手法は、ヒポクラテス全集の最良の作品群のすべてに用いられた「正銘の観察者の手順」によく似ていた。プラトンのヒポクラテス記述に該当するのは、あの「哲学的な医者」——人間の本性を語る際にも「一般化」を試みて「古い医学について」で攻撃された——でなく、むしろ、この作品の「経験主義的な」著者自身であった。後者は、哲学的な見方に抗して、人間の本性も種類を異にし、ゆえに、各々の胃に及ぼすチーズの影響も異なってしまうべきだ、と主張したからである。この作品はしかし、そうした理由からヒポクラテス当人の手で書かれたはずだ、などと結論づけたら軽率のそしりを免れない。プラトンの記述は「急性の病の食養生」の著者にも、さらには「流行病」の著者にも、同様に当てはまったからである。世の学者たちは繰り返して、ヒポクラテスの手法をめぐるプラトンの記述を「試金石」として、この人物の真作を全集に収められた他の作品から区分してきたが、そうした試みはことごとく失敗に終わった。それは、この箇所を単に曲解したからでもあったが、プラトンの記述にも問題はあって、これ自体、まことに幅広く曖昧であった。そこでは、前五世紀末と前四世紀に医学に行き渡っていた「手法」を例示するため、ヒポクラテスの名が用いられていたのである。ここでの手法を生み出したのは、おそらくヒポクラテス自身であつたろうが、今に残された医学作品には、この人物から手法を学んだ他の医者の手になる作品もあまた存在したにちがいない。自信をもつて主張されてよい唯一の事柄は、「人間の本性について」の著者——ガレヌスがプラトンの言葉を当てはめた当人——に特徴的な、自然哲学をめぐる壮大なあの一般化が、はたまた「古い医学について」で執拗に攻撃されたあの姿勢が、プラトンの手で「ヒポクラテスの手法」と記述

されたものの対極に位置した点ではないだろうか。ヒポクラテスの手法とは、具体的には、注意深い本性の分析（ディエレスタイ・テーン・ピュシン）であり、本性の型の数え上げ（アリトゥメーサスタイ・タ・エイデー）であり、個々の型にふさわしい処置の確定（プロサルモッティン・ヘカストン・ヘカスト）にほかならない。

プラトンが「医学に固有な」と記述している手順は、実のところ、かれ自身が——わけでも晩年の作品で——用いた手順でもあって、これを眺めたいなら、プラトンの対話篇をことごとく知り尽くすには及ばない。医学のテキストに目を通すと、それらが、プラトンの記述した「ソクラテス」の問答法をどれほど予想させるか、に改めて驚かないわけにはいかない。経験主義的な医者たちは、すでに眺めておいたように、あくまでも事実には強いられて、長い研究の末に「同じ性格」と決定した個々の事例を——プラトンの言い回しに従うなら——「一括りにしてタイプないし形相（エイデー）とみなした」。医学作品の著者たちが、こうしたタイプについて語る際に用いる言葉は「エイデー（形相たち）」であつて、錯綜した現象群の底に横たわる「一体性」を明示したい場合なら、用いられたのは「一なるアイデア」とか「一なる形相」という観念——一なる局面ないし見え姿（ミア・アイデア）——であつた。ここでの「エイドス」や「アイデア」といった表現を研究する場合、さらにはプラトンが——医学文献を参照しないで——これらをどう用いているかを吟味する場合も、導かれる帰結は同じであつた。双方の観念はそれはじめ、身体とその働きを研究する医者の間で用いられたが、次いでプラトンの手で、研究中の特定の対象——倫理の領域——に移され、さらに、存在論の全体へ広げられていった。そうしたプラトンに先立って、医学は、本性がさまざまな病気もさまざま（ポリュトゥウロピエー、ポリュスキディエー）なのが問題だと認知し、各々の病気のタイプがいくつあるかを確定しよ

うと努めていた。これはプラトンが、弁証法型の分析を通して実践した中身と異ならない。かれは、この分析を、数々の一般観念を区分してタイプに分類する」と称していたからである。

医学を哲学と対比しつつプラトンが思い浮かべるのは、基本的に、医学の規範的性格であった。だからかれは、同種の知識の別の実例として「水先案内人」に言及し、アリストテレスも、プラトンに倣ってやはりそうした。かれらは、医者与水先案内人の対比を、ともに「古い医学について」から借用した。ここでの対比をこうした関係で用いたのは、この作品を描いてなかったからである。もともとプラトンは、水先案内人と医者はともに学んで「行為の基準」を認知している、という点に関心を寄せ、アリストテレスは、示唆的なこの対比を用いて「別の点」を証明しようとした。すなわち、アリストテレスの『倫理学』の大問題の一つは、普遍的な基準を、個人の生活や別々の事例という、ざっと一般規則で決めたいような対象にどう当てはめるか、であったが、この問いは「教育の分野」でわけても重要で、かれは、個人の教育と共同体のそれを区分し、それを裏付けるべく「医学」に実例を仰いだ。かれはさらに、同じ医学を用いて、個人が、行為の正しい基準をどのように見出しうるかも紹介している。医学は、道徳的に正しい行為が、身体の健康な食養生と同じく、過剰と欠乏の「中間」を保つことにあるのを示してくれたからである。ここでの表現を十分に理解したいなら、アリストテレスに倣って、われわれの道徳が、好き嫌いの本能の調節に係わっている点を思い出してみるとよい。プラトンは、アリストテレスに先立って、充足と欠損という医学概念を用いて「快樂論」を展開し、こう結論した。「多すぎ（過剰）や少なすぎ（欠損）」が目によって調整を必要とする領域の一つが「快樂」なのだ、と。アリストテレスもこう語っていた、中庸を描いて基準などはない、と。ここでの中庸は、二つの極端の間に固定

された数学点としての目盛り上の絶対的な真ん中でなく、当事者本人にとつての「まっとうな中間」を意味する。ゆえに、過剰と欠損の真ん中に位置する（われわれにとつての）まっとうな中間を「目ざす」のが、倫理行為にはかならない。「過剰」「欠損」「中庸」「正しい比率」「目標」「感性（アイステーシス）」などアリストテレスの用いる言葉はすべて、このような脈略で理解されなくてはならない。さらには、絶対的・普遍的な規則の存在を執拗に拒絶し、当人の本性に適合した基準が見い出されなくてはならない、と訴えるかれの姿勢も、同じ脈略から理解されてしかるべきだろう。これらはすべて、医学から直接に借り受けられ、事柄を論じるかれの姿勢は、実際に「古い医学について」をモデルに仰いでいた。

しかるに、アリストテレスを「究極の保証人」に仰ぐあまり、ここでの（当人の）依存まで「独創性」——と今日誤って呼ばれているもの——に格上げしたら、ギリシア的な思考様式への「無知」を宣言したに等しい。そのような独創性など偽り以外の何ものでもなく、これを用いる輩は、事実への判断を誤らないわけにはいかない。プラトンとアリストテレスの教義は大きな権威を誇っていたが、それも、類似の思想領域から得られたあまたの結果で裏書きされていたからにはかならない。どの部分も他の部分を支え、かつ支えられている——これが、ギリシア生活の基本的な仕組みであった。それぞれの石は互いに支え合っているのである。この原理は——すでに眺めておいたように——ギリシア思想の初期のあまねく段階でも立ち働いていたが、ようやく、人間のアレテーをめぐるプラトンとアリストテレスの中心教義でこれを確かめる番となった。これなど、一見して「類比」と映るかもしれないが、単純な類比ではない。身体の正しい手当をめぐる医学理論は、魂の正しい世話と手当をめぐるソクラテスの理論に具体化され、いっそう高次の力に高められ

た。プラトンとアリストテレスの「人間のアレテー」観念には、魂に関わる諸々のアレテー（アレタイ）に加えて、身体に関わる諸々のアレテーも含まれていた。医学はだから、プラトンの哲学的な「人間学」に全面的に吸収されたといつてよく、その観念に立つと、医学という特定学問がパイデアの歴史にどう関わっていたか、の問いにも新たな光が投げられるにちがいない。医学は、医学上の問題や医学思想の類いを知的な民衆に予想させる以上の働きをなした。「身体」という人間生活の一領域に意識を絞ること、医学は——人間本性の新しい像を築き上げようと懸命に汗を流す哲学にとつて——この上なく重大な数々を発見し、各人が「人間性の理想」に近づくのを存分に助けたからである。

われわれの意図に従うなら、ギリシアの医学思想のすべてを同程度の正確さと細かさで吟味するには及ばない。医学思想の大半は、もっぱらに医学的研究や医学実践の細目に係わつて、目下の主題と直接の関わりを持たなかったからである。対して、前五世紀と前四世紀の医学は、ギリシア的な理想が形造られていく精神過程に大きく貢献した。その貢献は、最近になって今日の医学も重要と認め、ふさわしい仕方では開いたが、これこそ「健康論」にはかならない。この論は、ヒポクラテス医学による教育学への創造的貢献といつてよく、その中身を十分に理解したいなら、幅広い背景をもった「普遍的本性」という観念——当時の医学作品から明らかに——に異を唱えないわけにはいかない。すでに指摘しておいたように、ギリシアの医学思想は「本性」という観念に支配されていたが、当の本性は、具体的に何を意味したのだろうか。ヒポクラテス学派の研究者たちは、ピュシス（本性）の力をどのように解釈したのか。これまでのところ、ギリシア初期の医学文献における本性の観念を体系的に研究した者など一人も見当たらなかった。もしも居たなら、あの時代の——さらには後の時代の——精神史の全体に多くの光が投

じられたにちがいない。真の医者何たるかは、あまねく医学思想を貫いてこう紹介されている、部分を考えるにも常に全体を視野に収めることを怠らない人物、あるいは部分を見るにも、それが他のすべてと密接に影響し合っているのを決して見逃さない人物、がそうなのだ、と。ここで思い起こされてよいのは、プラトンが『パイドロス』でヒポクラテスをどう記述していたか、ではないだろうか。かれの心に浮かんでいたのは、われわれが「有機体的な自然観」と称するものにほかならない。プラトンが切に望んだのは、いかなる対象であつても全体の中に位置づけて部分の働きを捉え、当の部分に対する適切な処置を講じるべき点を、医学的な手法に鑑みて示すことであつた。問題へのこのような接近の例証が「医学」であつた——これ自体は注目されてよい。プラトンは『パイドン』で初期の自然哲学者たちを強く非難したが、それは、かれらが宇宙の内在的意図という要素を考察できなかったからであり、そうした点は、「有機体的な自然観」とも密接に結び付いていた。かれは、自然哲学に探し求めて果たし得なかった事柄を「医学」に見い出したのであつた。

十九世紀の科学と医学は、むしろ、このような光にかざしてギリシア医学を眺めなかった。まことに片寄つたこうした見解から、医学史を研究する最近の学徒たちがギリシア人を扱う仮説の数々も誕生したが、そうした見解といえども、自然現象への目的論的接近が、のちのギリシアの医者たち——わけでもガレヌス——の仕事の本質をなしていたのはよく知っていた。ならば、ほんの一瞥しただけで、哲学の悪しき影響が医学思想を歪めたのも理解できたらうに、この見解はあろうことか、ヒポクラテスをガレヌスの対極に位置する「完全な経験主義者」と考えた。これではヒポクラテスが、目的論など抱懐しなかったと語るに等しいだろう。この人物は普通、「自然（ないし本性）」は純粋に機械的な因果連関

の内にあるという論を代表する古代の旗手の一人とみなされているが、もしも「釣り合い」の観念を思い浮かべたら、それらもすべて「偽り」ではないかと疑わないわけにはいかない。これまでも見てきたように、「古い医学について」を支配していたのは「釣り合い」の観念で、その影響は、ギリシアの医者たちの実践全般に及んでいた。と同時に、目的論はこうした脈略で語られるべきだという「まっとうな感覚」も、この観念から学ばれるにちがいない。病気によって秘められた釣り合いが乱されたとき、回復に導くのが医者の務めといえる。健康な折には本性がそうした釣り合いを生み出す、あるいは、そもそもの本性が正しい釣り合いにほかならない。釣り合いや調和（シンメトリー）の観念と密接に結び付いたものに「混合の観念」があつて、この混合は、有機体を支配している各種の力の「対等の均衡」を意味した。本性は、知性のみが捉えられるこの基準（＝混合）に至ろうとする（だから本性は、しっかりと記述されなくてはならない）。プラトンは、頑強や健康や美貌を身体に係わる「諸徳（アレタイ）」と称し、これらを、魂に係わる倫理的な諸徳の対応物と呼んだが、その理由も、ここでの立場（＝混合）に身を置くとよく理解できるのではないだろうか。アレテーという言葉でプラトンが意味するのは、医学的発想に従うなら、「正常な健康」の構成要素である諸々の部分ないし力の調和（シンメトリー）を描いてない。だから、アレテーという言葉で初期の医学作品に目にしても驚くにあたらない。この言葉は、プラトンの影響ではじめて導入されたわけではないのである。本性をこのように眺める姿勢は、古えのギリシア医学全般に目にされた。本性の支配の底には「意図」が横たわっている——この点は、病気において鮮明に浮かび上がってくるだろう。病人の治療で、医者は、本性を気ままに扱うわけではない。病気の兆候——「わけても発熱——は、実に、正常に復そうとするプロセスの始動を告げるにすぎない。そうしたプロセ

スの口火を切るのは身体で、医者は、自己治療に向けた本性の衝動を助けるべく、介入のチャンスを注意深く見守るほかはない。これこそ、ヒポクラテスの病氣理論の基本的公理で、この公理は、同時に自身の目的論的基盤を表明してもいた。

二世代ばかりのち、アリストテレスは、自然と技術の関係を規定してこう語った、技術は自然を模倣し、自然の欠陥を補うために創り出された、と。この見解が仮定するのは、自然には「目的」が行き渡っていることで、それゆえ、自然が「技術の原型」とみなされている。これに対して、ソフィストの時代には、身体の各部と技術的工具や発明品を比較して、その類似点を際立たせながらこう証明する医者も少なくなかった、人間という有機体は「目的」に支配されている、と。アポロニアのディオゲネスは、そうした目的論の好例にちがいない。この人物は、自然哲学者と同時に医者でもあつて、こうした目的論の創設者と考えられていた。ともあれ、目的論の起点が医者サークルにあつたのは間違いがなく、ヒポクラテス全集に収録された「心臓について」には、これがはっきりと目にされた。しかるに「食養生について」の第一巻には、もつと神秘主義型の目的論が含まれ、それに従うなら、あまねく技術は「人間の本性」を模倣し、ゆえに、技術を理解したいなら本性との霊妙な類比を心掛けないわけにはいかない。もつとも、著者が「物証」に加え入れているのは、こじつけ紛いの具体例であつたけれども……。このような目的論をアリストテレスもディオゲネスも共有しないが、ともあれそつと垣間見られるのは、こうした発想がどれほど広くかつ多彩に当時の医学思想に行き渡っていたか、にちがいない。「医者の技術は、苦痛を与えているものを取り去って——さらには病氣の原因を拭き去って——人びとの健康を回復するために在るが、これを本性は、誰の助けも借りずに実行できる。座っているのが苦痛なら立ち上がればよいし、動

き回るのが苦痛なら休憩すればよい。この手のことやその他のあまねく医者の技術に属する事柄は、すでに本性中に存在する」などは、その好例といつてよい。これは、この作品の著者の個人的な考察にすぎないが、ヒポクラテス学派も、医者の務めは本性に奉仕してこれを補うにある、と考えていた。だから「流行病」には、次のようなセリフも目にされる、「患者の病いを癒す」医者「は、当人の本性を措いてない」と。この意味は、個々人のピュシス（本性）こそ「内なる目的」と協働する実体にはかならない、だが、続く文章——ないし金言——では「普遍的なピュシス」に触れて、こう語られていた。この本性がみずからの手段として用いるのは意識的な知性でなく、瞭のまばたき、舌の動き、はたまた同様の現象群であつた、と。のちの自然哲学者たちは、すでに指摘しておいたように、医学思想に影響され、自然の中の「目的」という問題を解くにあたり、世界全体に内在する「神的な理知」が自身の想いを万物に命じるからだ、と考えた。ヒポクラテス学派の人びとは、このような形而上学的仮説を却下したが、それでも本性が、それと意識されない目的との係わりで活動するのを褒め称えた。今日の生気論は、意識的なものと無意識的なものを架橋するにあたり、生理学の観念を用いてこう主張している、さまざまな刺激への反応こそ有機体の目的志向のプロセスなのだ、と。ヒポクラテスには、そうした発想はみられない。古えの学問は、ここでのプロセスがどのように始まるか、になど関心も寄せなかったが、それらの存在は疑う余地のない事実で、ゆえに、次のように解釈された、本性の中の「目的」はつねに生物の生活に結び付いている、と。医学が対象とするのは、ここでの「生物の生活」なのである。

先に言及された「流行病」の箇所提示されているのは、「エウパイデウトス・ヘー・ピュシス・ヘクーサ・ウー・マトゥーサ・タ・デオンタ・ポイエイ」、つまりは、本性を導いて必要な事柄を為さしめる無意識的な

パイディア、にちがいない。しかるに、リットレ版のヒポクラテス全集——出版年を考えると貴重ながら、ほとんどのテキストが最善の形で手に入る一方、原典批判からは十分とみなしがたい——ではこれが裏返され、こう読まれていた、「本性は無教育で何一つ学んでいないが、それでも正しい事柄を為す」と。これと同じ「後ろ向き」の発想は、金言に溢れた「食物について」をまとめた後代の著者でも、「あまねく事物の本性に「師」は認められない」という形で登場していた。これを一瞥すると、あたかも本人が、われわれの引用した「流行病」の箇所の「異文」を目にして模写したかのようなではないか、と勘ぐらざるをえないが、もしもそうなら、このやり方は間違っていたというほかはない。かれと時代を同じくする人たちは、パイディアを欠いても事柄は正しく為される、などと口にするのは「乱暴なパラドックス」以外の何ものでもない、と考えるだろうからである。本性は、その仕方を学んでもいないのに正しい事柄を立派に為せるなら、おのずと、自己教育の才を具えていなくてはならない（「エウパイデウトス」）。本性はみずからの技を磨き上げるが、それは、携わっている仕事に直接に用立てたからにはかならない。このような読み方——最善の写本に登場する——を採用したのは、エピカルモスの作とされた金言集の編纂者であつた。かれは、本性の知恵を説明するにあたり、寸分違わず、こう示唆していたからである。本性はみずからを教育している、と。ここでは、大いなる本性の無意識的な推論作用は、人間の意識的な「磨き上げ」に対応すると考えられていて、この発想は、医学作品に時折その顔を覗かせるソフィストのあの発想、すなわち、パイディアを介して人間本性を形造る行為は植物の栽培や動物の飼育に相当する、に比べて、いっそう懐も深いのではないだろうか。パイディアは、後者のように眺めると、外部から課された訓練以外の何ものでもないだろうが、ヒポクラテス学派の見解（「前者」に従うと、本性

の目的志向型の行為は無意識的で自発的な前段階に等しかったからである。これは、本性をもつと理論的にし、翻つては、理知をもつと本性的にするだろう。これと同種の知性主義の姿勢は、身体的な出来事の説明に精神的な類例を用い、かつ、精神的な出来事の説明に身体的な類例を用いないわけにはいかない。「流行病」の著者は、こうした手法に訴えて「身体の行使は四肢と肉を養い、腸は眠りに陥る」や「思考とは魂の巡り歩きにほかならない」のような活き活きした文章を鑄造した。

さて、目的志向的に活動する無意識的で自発的な「力」こそ本性にはかならない、という発想に思いを巡らせたなら、「食物について」で目にされる、「およそ本性は、誰にとつてもいかなる事柄にもそれだけで十分なのだ」という見解の意味もいつそう理解し易くなるだろう。本性の均衡が乱されている時、医者とは、自身の技術を用いて回復に向けた本性の活動を促すが、ここから、次の点もおのずと導き出されてくるにちがいない。今にも起りそうな障害を阻止し、正常な状況が保たれるように油断なく見張ること——かれの務めはこれを措いてないのだ、と。古典時代には、ここ二、三〇年前までのどの時代にもまさって、医者の関心は、病人によりは健康人に注がれていた。健康を扱う医学部門は「衛生（タ・ヒュギエナ）」という一般名で世に知られ、その主たる関心は「食養生」にあった。この食養生は、ギリシア人にとって、病人の食物を単に定めるだけでなく、人間の全体的な生きる手順——わけでも、かれの食物をどのような規則が支配すべきで、当人はどのような努力を払うべきか——まで包括していた。医者は、人間という有機体について目的論的な観念を奉じる以上は、教育的な務めも果たさないではいられなくなった。健康に対する配慮は、昔ならほぼ完全に「私事」に属し、ゆえに、当人の実践的知性や、その必要度、用いる手段はいうに及ばず、当事者個人の文化レベルに大きく左右された。それは「体育」とつねに結びついて

いた。体育は、平均人の日常の重要部分を占めていたからである。体育的訓練は、長年にわたる衛生的体験の所産であつて、身体とその活動の絶えざるコントロールを要求した。体育教師は、どのように身体の世話をしたらよいかを患者に助言する専門家として医者に勝っていた。「食養生」の新たな理論が開発されても、当人は「お役御免」とならず、つねに、医者の傍らに自身の場を確保した。医学は、体育の領域の侵犯から始まったが、現存する栄養学的作品によれば、双方の領域はすぐに区画され、医者は、いくつかの点で体育教師の權威を絶対的に受け容れていたのがよく分かる。

日常生活の「正しい食養生」を扱った医学文献は、ギリシア文化のあまたの時期に求めたら夥しい数にのぼるだろうが、そうした遺稿のいくばくかは、われわれの手元にも残されている。これらの歩みを復元できたら、おそらく、さまざまな時期にどのような変化がギリシアの社会生活に登場したかに貴重な光が投げられようが、ここでは、その発端的を絞ってみたい。衛生を扱った最初期の作品は散逸して今はないけれども、医学文化のこの部門がはじめて取り上げられた時期、すなわち、前五世紀の末から前四世紀の初頭にかけてなら、「健康に占める食養生の役割について」と称される小作品が目にした。しかも「定説化された制作年代」を受け容れると、さらに、二片の証拠を加え入れてよいかもしれない。古代にその名を誇った「食養生について」と称される四巻本と、カリストスのディオクレスという高名な医者がまとめた作品——今は散逸して後の著者たちの引用文中に姿を留めるのみ——の長い断片である。双方の制作年代はしかし、これから紹介するように、定説化されているより「さらに後」とみなくてはならない。双方には、ある種の典型的な特徴が目にとまり、それゆえ、特定の一時期を代表すると考えられてよいが、テーマを扱う手法は異なっていた。そのような差が物語る

のは、ここでのテーマが双方の執筆時点でかなり高度に展開されていたこと、双方の著者が深い個性の持ち主であったこと、にちがいない。双方は、こうした理由から別々に記述されてしかるべきだろう。加えて、当時の食養生学の歩み全体から、ヒポクラテス全集に収められた他の作品群に散見される健康人の養生法に向けた諸々の「規則」も照らし出されるにちがいない。

「健康に占める食養生の役割について」がまとめられたのは、シロウトの一般人を導いて日々の「食養生」への適切な方法を選ばせるためであった。この点は「疾患について」と称される小作品も同じで、ゆえにこれは、古典時代にも原稿の上で「健康に占める食養生の役割について」の次に置かれた。「疾患について」は、シロウトを教育するのがいかに難しいかを論じ、かれらが、みずからの世話に励んで病気の悪化を防ぐには———そうできないなら、医者の処置を理解して医療行為を後押しするに———は———どれほど多くの医学知識を必要とするか、の吟味から幕を開け、最後には、病人の食養生はいかにあるべきかを———一般読者にも理解できるように———記述して幕を閉じる。それは、構成の上で「健康に占める食養生の役割について」と対をなし、古代に人びとが、なぜ双方を同じ著者の作とみなしたか、も理解できるにちがいない。健康人の養生法のために「疾患について」が定める規則は、季節、場所、組織、年齢、性別にふさわしい食物と訓練を幅広く覆っていたが、綴られていたのは———小難しい専門語でなく———平易な一般語であった。一種の医学的な「力の均衡」を保つこと———これが、著者の主たる考えにほかならない。寒い季節であれば、処方されるのは多くの固形食とわずかな流動食で、暑い天候であればその逆が処方された。熱と乾を増やして冬の働きを補い、湿と冷を介して夏の働きを補うためである。およそこのように、かれが試みるのはつねに、身体を支配してやるぞと脅す「特質」の真反

対を強調することであった。というのも、「人間の本性について」の著者と同じく、われわれの身体を構成するのが単一の要素でなく、さまざまな複数要素である以上、それらの正しい釣り合いは、熱・冷・湿・乾という四基質のいずれが増えすぎると容易に歪められてしまう（つまりは病気になる）、と信じて疑わなかったからである。このような理論はあまりに図式的で「古い医学について」の著者は容赦なく却下した———これ自体は正しい———が、その図式主義が逆に、当の理論を使い易いものにした点は否定できない。この理論でイメージされた食養生は、いうならば「単純外交」を身体に当てはめたに近く、二・三の異なった要素を操作する技術にすぎない。この理論は、およそ百年ばかりのちディオクレスの作品でみせた発展をいまだ見せていなかった。ディオクレスは、朝から夜にいたる丸一日の振る舞いを詳しく定めたが、それに先立つこの作品は、夏と冬という二つの極に———さらには、春と秋という二つの移行期に———ふさわしい食養生がどのように異なるか、を簡単に記したにすぎないからである。後者の規則に合わせて生活するのは困難であったが、それは、当の規則があまりに細かったからでなく、あまりに一般的すぎたからにほかならない。医者と体育教師の関係はいまだ固定されていなかったが、この作品の著者は、みずからの理論に忠実に次のように示唆した、身体の訓練は、体育教師に助言を求めるまでもなく、季節に合わせて強度を増し、はたまた減らさなくてはならない、と。

「食養生について」という四巻本で扱われているのは、これと異なる中身であった。まさに正銘の「百科事典」といつてよく、これを称して著者も、この領域ですでに目にされたあまたの文献を———補填の必要な箇所———収集する企てにほかならない、と口にしていた。当人は哲学者で体系的な理論を好んだが、だからといって「編纂者」と呼ぶのは正しくない。人びとはこれまで、かれの作品の分析にせつせと汗を流したが、

問題がいつそう解決に近づいたか否かは疑わしい。かれらは作品を薄切りにし、幾つかの塊にまとめ、これこれはしかじかの原本の写しであるとかラベル化した。たとえば、これ(A)はヘラクレイトスを真似たソフィストからの写しであり、これ(B)はアナクサゴラスの弟子からのそれ、これ(C)は栄養学者のヘロディコスからのそれ、という風に……。さらにはこうも主張した、この作品のいくつかの部分は、ヘラクレイトスに近い響きを発し、ゆえに、或る自然哲学者にまで遡る部分から区別されるべきだ、と。とはいえ、この自然哲学者も「アナクサゴラスの弟子」とは言い切れない。その発想のいくばくかは完全にエンペドクレス風であったが、それ以外は、アポロニアのディオゲネスを彷彿させたからである。この作品の著者はこう主張している、わたしは、自身の蒙った影響の多彩さはしかと実感しているが、医者としても哲学者としても、なただけ普遍的でありたいと切に願っている、と。これは、素直に受け入れられてよいだろう。以上をまとめると、この人物は、ヒポクラテスよりのちの時代に属する点が浮かび上がってくる。それゆえ、前五世紀後半の三十年間に「古い医学について」をまとめた人物が「哲学かぶれの医者」として攻撃した当人と同じであるなど——たとえ一般に信じられていても——ありえない。むしろ反対にかれは、「古い医学について」が世に現われてのち、自身の作品をまとめたのではなかったか。かれには、この作品に目を通していた節が見受けられるからである。かれは実際、この作品の命に服して、一般性の手前で踏み留まらないのを苦痛とし、くり返しこう指摘した、医学では大半が個人的要素に依拠している、と。さらには「正確性」にも心を煩わせて、こう宣言した、熱と冷をどのように供給すると身体に健康なのかの幅広い一般規則を定めるなど——以前の「健康に占める食養生の役割について」ならいざ知らず——ナンセンス以外の何ものでもない、と。これに替わって求められている

のは、あまねく食物の効用を正確に記述することであった。かれの作品は、古代にも、詳細な情報の詰まった「宝庫」として盛名を馳せていた。ゆえにガレヌスはこう考えた、この作品の第二巻は、哲学とか外来データでまだらに染め分けられた第一巻にも拘わらず、ヒポクラテスの真作にふさわしい、と。この作品の多くがオリジナルでなく、原資料から著者が写し取ったにしても、かれはやはり、思弁的な哲学と経験主義的な医学のくり広げる旧来の理論闘争を乗り越えて、意識して双方を結び合わそうと試みている、と認めないわけにはいかない。

ヒポクラテス学派が教えたのは、医者たるもの、患者の体質のすべて、その気候的・地域的な環境、当人に影響を及ぼす自然現象上の変化、等々に虚心に耳を傾けなくてはならない点であった。それには、普遍的本性への哲学的関心が不可欠なのだ——「食養生について」の著者はこう考えた。しかるに「古い医学について」の著者は、その時点で優勢なのは有機体のどの部位かを把握する以上に重要なことはない、と考えて憚らない。前者はしかし、そうした問題がこの上なく重要だと認めつつも、これを解こうとすれば、人間の身体がどうした部位から構成されているかに無知でいることはできない、とも考えていた。診断は、宇宙の本性を直接に把握する「叡智(グノーシス)」と切っても切れない関係にあつて、この叡智から派生するのが、正しい食養生の細かな知識にほかならない。そこには、さまざまな食物とそれらが異なった体質にどう影響するか、の知識を中核に、肉体的訓練や体育の知識までがたつぷりと含まれ、後者の重要性は、正しい栄養をめぐる前者の知識に劣らなかったが、「古い医学について」の著者は、多くの初期の他の医者たちと同じく、これには口を噤んでいた。対して「食養生について」の著者の教えはこうであった、身体を「いたわる」栄養と身体を「いじめる」訓練という真反対の両要素の均衡が、注意深くかつ組織的に図られなくてはならない、

と。これは、以前の作家たちが身体に当てはめた「調和（シンメトリー）」という理想の潤色にはかならない。調和の理想は、当人も仄めかすように、身体の訓練に——ひいてはそれと栄養の関係にまで——押し広げられなくてはならない。ここで依拠されているのは、思うに、セリンブリアのヘロディコスの理論であろうか。食養生での支配的地位を「身体の訓練」に与えて、これを、体系的に解き明かした最初の人物が「かれ」だったからである。当人は、みずからも体育教師であったから、体育を用いて自身の病いを癒し、これを、自他の治療体系に組み入れた。かれの名は世に知られ、ゆえに体育も、そうした行為を介していくぶんは著名になったことだろう。「流行病」の第六巻をまとめた皮肉屋の著者は、この人物をコメントしてこう述べた、かれは、受け持ちの発熱患者に過度のスポーツを課し、あまりに多く蒸し風呂入浴を勧めたおかげで、とうとう殺してしまった、と。プラトンも冗談を交えてこう漏らしている、当人は、ついに自身を治せなかったが、それでも人為的に死を延ばし、幾年にも互って自身を「苦しめる」ことはできたのだ、と。アリストテレスの見解はこうである、多くの人びとは「健康」を手放しで称えるが、そんなに適切といえない、なぜなら、あまねく快を慎むのが「健康」の唯一の道であるのだから、と。これは、プラトンに従うなら、ヒポクラテス自身にわけても当てはまった。「食養生について」の著者は、栄養と身体的訓練の釣り合いを定めるべく腐心しているが、それはおそらく、前四世紀に行き渡っていた「批判」に答えようとしたからにちがいない。かれ以外の医者たちは、医学という技術の「独立性」を熱く主張したが、この著者は、はるかに広い医学観念を手にし、そのような理想との折り合いを求めなかった。当人も口にするように、誰にも妥当する栄養と訓練の釣り合いなど見出しがたいからである。ここには「古い医学について」の著者との論争が読み取られてならない——これが、わたしの胸

の内といえるだろうか。この作品の主要な考えは、すべからず繰り返され否認されていたからである。「食養生について」の著者は、医療はいまだ「真の完成」に至っていないと考えたが、それは、個々人の必要に応じる」という問題を解決できないでいたからにはかならない。そのかれも、こう認める準備はできていた、医者も体育教師のように、治療している個々人をたえず目の前にしていたら、この理想にもっと近づけたであろうに……。それはしかし、基本的に出来ない相談であった。

かれ自身は、大半の医者と異なって、病気がすっかり定着してから手を出すというやり方を望まなかった。だから、しっかりと守られたら発病を阻止しうる「詳しい食養生」をまとめたのだった。これは「診断に先立つ診断」であり「治療に先立つ治療」であって、当人の発明品にほかならない。こう観察されたからである、個々人は、目下の数倍も医者の務めを側面的にサポートし、自身の治療の「意識的な助手」として振る舞う気にならないと、正しく治療などされようはずもない、と。この作品の第一巻に基本仮説となる自然哲学の理論を定めたのち、著者は、第二巻で歩を進め、さまざまな気候や地域が「健康」にどうした影響を及ぼすか、次いで、あらゆる種類の植物食や動物食が——最も取るに足らないものに至るまで——どうなのか、を詳しく記述した。教養あるギリシア人の食養生がどれほど豊富で多彩であったかは、これを介して垣間見られるにちがいない。医者の掲げるリストは、あまたのドーリア喜劇やアッティカ喜劇で早口にまくしたてられた長い台詞のメニューより盛り沢山で、作品の他の部分に劣らず体系的にまとめられていた。すなわち、まずもって手が染められたのは、あたうる限りに多彩な植物食を、穀物タイプと野菜タイプに区分けすることで、葉草と果物は、ここから省かれて肉類のあとに登場したが——食養生からみると——むしろ「珍味」ないし「薬味」（オプソン）に類別されたからにはかならない。対

して動物食は、哺乳動物（年老いたものと年若いものに細分された）、鳥類、魚類、貝類に区分され、野生動物と家畜が、食物としての効用の観点から論じられている。次いで登場したのが、卵、ミルク、チーズといった動物の産出品とこれらで作られた皿料理で、蜂蜜は——ふつうは飲物に混ぜて用いられたから——飲物の項で一緒に扱われている。

性急な一般化を「古い医学について」であのように攻撃した人物こそ、ここでの著者にほかならない——広く行き渡ったこの見解を覆すには、チーズを扱った短い章のみで十分ではないだろうか。「古い医学について」ではチーズを用いながら、一般化に毒された医者なら、およそチーズであれば健康に害を及ぼさないものはないと主張して憚らない、とコメントされていたのに、この作品の著者は、食物としてのチーズの重さは口にしながら（この点は正しい）、それでも滋養に溢れている、と付け足していた。両作品の容認された制作年代は、それゆえ逆転されるべきだろう。この栄養学者は、明らかに「古い医学について」に目を通し、他のものと古いヒポクラテスの作品も活用していたからである。たとえば「空気、水、場所について」の序文に、医学の見地から「重要なり」と列挙された気候的要素のリストを逐語的に写し取っていたし、身体の訓練はそうした要素類に相談して決めなくてはならない、と定めてもいた。加えて、「流行病」に表明された見解もよく知っていた（この作品の写しは、コスの学派が所持していたのではなかったか）。「流行病」では——すでに目にしたように——「思考」が「魂の巡り歩き」と呼ばれ、この著者は、そうした発想を（何らかの源から）手に入れて、自分なりの仕方 で組織的に用いていた。かれの中では、単に思考ばかりでなく感覚の活動や会話までも「訓練」に類別され、「ごく自然な」骨折りとして特別なカテゴリーにまとめられて、人為的ないし「極端な」骨折りに類別される歩行や体育的訓練とタイプを異にしていた。身体運動論は——このよ

うな理論とも結び付いて——著者の「創作」の公算が大きい。こう語られていたからである、魂が活動するとき、それは熱くて乾いたものとなり、身体も、その「湿」が使い果たされると痩せないわけにはいかない、と。

「食養生について」は、われわれの手を引いて前五世紀から連れ出すばかりでなく前四世紀にまで導き入れてくれる——このような結論に抗うことはできない。それを裏付けるさまざまな証拠、たとえば言い回し、文体、主題等々が目にされたからで、これらは、たった一つでも十分であつたろう。この作品の著者はこう勧めていた、マッサージはオイルに水を混ぜながら続けた方がよい、身体を過度に温める心配もない（ウー・デイノース）だろうから、と。ここでの問題を研究したのがカリストスのディオクレスで、かれは、実父であつた医師アルキダモスの追憶に捧げるべく、これに父の名を冠した。そのアルキダモスは、オイルのみを用いたお定まりのマッサージを強く非難したが、それは、身体をあまりに熱くし過ぎたからにはかならない。ディオクレスは、父の提示した理由を駁して「折衷案」を示唆した。すなわち、夏場ならオイルに水を混ぜたマッサージがよく、逆に冬場なら純然たるオイルのみのものがよい、という風に……。オイルに水を混ぜたマッサージの推奨も、そのために提出された——身体の熱化を避けるという——理由もユニークそのもので、ために、ディオクレスが「食養生について」の著者に賛成票を投じたのも「偶然」とは考えられない。ならば、そうした発想を生み出したのはどちらなのか——この点は論じるに及ぶまい。ディオクレスをめぐる拙著でも証明しておいたように、この人物は、前三〇〇年以後も生き延びて、この直前に「経歴の頂き」を迎えたから、「食養生について」の成立年代も、ここまで遅らされてはならない。アリストテレスと逍遙学派の影響は、ディオクレスの全仕事を貫いて著しいが、「食養生に

ついて」には——それ以外はさておき——認められない。この作品の著者は、それゆえ、ディオクレスの父がオイルのみのマッサージを非とした点は知悉していて、その宣告を「誇張」とみなしたことになる。これは、身体を熱くし過ぎないようにオイルに水を混ぜたマッサージで一応の妥協を図ったが、ディオクレスはしかし、夏場にはこの案を受け入れつつ、純然たるオイルのみのマッサージも冬場用に残しておいた。これ以外にも、ディオクレスが「食養生について」に目を通して活用した、と信じてよい理由はいくつか目にされ、この作品はだから、父親のアルキダモスと時代を同じくする人物の手でまとめられたものではなかったか。そこに認められる折衷的性格、その長さ、さらには引用された他の書物の多さも、成立年代を、この時期に定める一役を担っているにちがいない。

われわれを助けてこの著者を前四世紀に位置づけさせる点は、他にもないわけではない。かれには、みずからの資料をタイプと部類に区分けする傾向があつて、これなどもそうだろう。そのような方式が行き渡ったのは前四世紀を措いてなかったからである。なるほど、タイプ（エイデー）化する風潮は、ひとつ先の前五世紀にも医学的実験のあまねく領域で目にされたが、それが後期段階を迎えたのは前四世紀で、この点は、この著者が、動物界と植物界を美しいまでに体系化し、ゆえに、あまねく食物をあれほども詳しく記述できたことでも裏書きされるにちがいない。ちなみに、かれの動物学は、数年ばかり前、動物学を専攻するいくばくかの学者たちの関心と呼んだ。かれらには、「食養生」のためだけに一介の医者が、これほども複雑で、これほどもアリストテレスの体系に近い壮麗な学を練り上げたとは信じられなかったからである。その学はあまりに丹精で細かく、動物学理論への興味・関心に支配されすぎているように思われたが、これが、前五世紀に——つまりはアリストテレス

以前に——「独立の学」として扱われていたとは耳にされず、その点も、上の成立年代を裏書きしているのではないだろうか。このようなディレクンマの中で、とうとう学者たちもこう結論した、ヒポクラテス学派は、医学的な目的から動物学を包括的に研究した——古えの著者は一人としてそう口にしていない——に相違なく、ついには「食養生について」を元に「コス派の動物学体系」を再構成したのだ、と。だが、いくらそう想定しても、アリストテレスの動物学理論にきわめて近い壮大な体系が前五世紀に存在した、とは信じがたい。これに対して、この作品の成立年代をプラトンの時代に定めたら、その構造が提示する「謎」もいっそう解き易いのではないだろうか。エピクラテスという喜劇作家が同時期にまとめた有名な文章には、こう語られていた、プラトンの学園アカデメイアでは動物界と植物界のすべてを類別するべくさまざまな企てが繰り返されたが、これには、一人のシケリアの医者が参与していた、と。この参与者はきつと、類別の中身にウンザリし、その不満をかなり無作法に表明していたが、ともあれ「参与した」わけで、この事実は、そうした研究が——著しい「経験主義の欠落」から失望を招いたにせよ——医学に関心を寄せる面々に「遠路も辞さない」参集をせよと呼びかけたのを物語っていた。はるか遠方の国々からプラトンの学園に参集したのは、異なつたタイプの心の持ち主たちで、先のシケリアの医者もそうした訪問学者の一人といつてよい。ここでの主題に係わつたアカデメイアの業績は、のちにスペウシッポスの手で公表され、アリストテレスにも活用されたが、「食養生について」の動物学体系は、双方の仕事に酷似していた。とはいえ、この体系とスペウシッポスやアリストテレスの繋がりを経最終的に判定するのよりは、むしろ、その体系では植物がどのよう分類され、植物以外のタイプの研究にはどうした方法が用いられているか、を分析した方がいっそう得策にちがいない。だからまず、この

著者の属する知的環境をごく一般的に記述しておこう。この人物の登場は、プラトンが動物と植物の分類に手を染めて以後のこと、などと決めて掛かるには及ばない。プラトンは、みずからの弁証法型の分類方法を説明した際に(『パイドロス』二六五以下)こう語っていたからである、この方法がモデルに仰ぐのはヒポクラテスにほかならない、と。なるほどかれ自身は、この方法が、かつて人間以外の有機体に当てはめられたとは口にしていないが、それでも、こう信じていけないわけでもない。医学の各学派は、プラトンの時代までに、この方法を人間と同じく植物や動物にまで押し広げ、そうした探求には、哲学者も医者も共通に関心を抱いていた、と。

ところで、注目に値する事柄が一つある。「魂」という言葉が、ヒポクラテス全集のどの作品にも勝って「食養生について」で頻繁に用いられているのである。この言葉が他の作品にみられても、おそらくは「例外」ではないが、これのみは「偶然」といえない。その点について、こう語っても十分な説明にならないだろう。この著者は、この言葉をヒポクラテスという「源」から写し取ったにちがいない、というのめかれは、自然哲学を扱った箇所でも、食養生を扱った箇所でも「魂」について語り、身体的なプロセスを魂に反射させたもの——夢の中で示されるような——に、第四巻のすべてを割り当てていたのだから、と。この人物は、異なった夢の中身を詭弁的に解釈しているが、そこには、インドやバビロニアの「夢の書」——前者はかれの作より先で、後者はもっと後——との共通点があまた目にされた。これを目にして、学者たちはこう結論した、ここには少なくとも、東方世界からギリシア医学に向けた直接の影響が見て取られるにちがいない、と。この点は、もっと以前の時代もさることながら、わけても前四世紀に当てはまった。イオニア人の医師クテシアスとクニドスのエウドクソスは、たまたま東方世界につい

ての非公開の個人知識を手に入れ、うちエウドクソスは、そのいくばくかをプラトンのアカデメイアに伝えたが、それは前四世紀だったからである。ギリシア人は、魂の味わう「夢の生活」をめぐって東方世界の叡智——ないし迷信——を受け容れたが、これは、自身の思想が「魂」に的を絞って以後であつた。しかも、学問的かつ理論的にそうしたのは、前四世紀を迎えてなのである。これらの新しい発想を記憶に残る形で表明したのはアカデメイアで、魂の送る「夢の生活」とその真意への哲学的関心をこの学園に押し広めたのは、プラトンの靈魂論にほかならない。アリストテレスもその経歴のはじめ、この問題を論じて対話篇をまとめ、「食養生について」の著者も個性的な思想を展開しているが、おそらく、アカデメイアでの研究に影響されて「夢の問題」に取り組んだのではなかったか。

アリストテレスが自身の対話篇でしたのと同じく、この人物も、魂をめぐるオルペウスの発想から論を開始した。すなわち、魂そのものが完全に自由なのは、身体が深い眠りに陥っている時を描いてない、その時に魂は、すべからく一体化し、いささかも部分化されず、完全にそれだけで存在しているのだから・・・と。かれはしかし、この教えに、特有の医学的な「ひねり」も加えている。こう口にしていたからである、眠りの中で魂は、その所有者の身体状況を——外界の雑音に乱されないから——くつきりと映し出す、と。現存するアリストテレスの『夢解釈について』には、夢の意味をめぐって前四世紀に学問的論争がくり広げられた、と紹介されている。夢は、アリストテレスの観察に基づくなら、実生活の諸体験に影響されて生まれ、ゆえに、未来を告げるなどと信じ込んでならぬ。これと同じく「食養生について」の著者も「夢占い」を直接には受け容れず、それを「予言」から「予測」に置き替えようと腐心したが、固有の典拠に従い過ぎて「迷信」に墮してしまった。

この作品で用いられている「言語」に目を向けると、前四世紀の初頭——ないしもっと先の時代——よりは、この世紀の中葉が浮かび上がってならない。イオニア言語は前四世紀を通して用いられ、さまざまな対句や程よい節に溢れて洗練され、時として長々と退屈なその文章からは、ゴルギアスの時代よりは、イソクラテスにみるレトリックの全盛期がむしろ髣髴されたからである。このような文章は、ヒポクラテスの——あるいは用心して、その直接の後継者たちの——時代に属する、純朴でレトリック色を欠いた「専門論文」と同時期にまとめられたはずがない。いつそう古い世代の専門色が薄くて一般色の濃い作品群は、ソフィストという手本の影響を強く受けていたが、この作品の散文とかなり異なっていた。この作品の文体は、章から章へと目まぐるしく変転し、ゆえに、大半の学者はこう述べた、この著者は、異なった作品群を単に写し取ったにすぎない、と。けれども当人は、望んだなら芸術的に書くこともできたから、これは、おそらく「多才を気取って」のことで、序文にも告げられている「総合」の理想の具体的実践ではなかったか。こう語られていたからである、わたしは、先人たちの理論をせつせと結び合わせたから、きつと「創造性に欠ける」と侮られるにちがいない、と。かれ自身はしかし、これを誇りとしていたように思われてならない。ここに覗き見られるのは、「さまざまな文体の混ぜ合わせ（＝総合）」こそ最高の文学技法で、著者の目ざすところも「ここ」にあった、という発想であろうか。これ自体は、イソクラテスにはじめて目にされたが、かれの関心は「内容」よりも「様式」に向けられていた。この作品の著者も、イソクラテスと同じく「独創的か否か」をめぐる世の評判を気にしていたが、そうした気兼ねも前四世紀の特徴といつてよい。

もう一人の著名な医者も、一般には前四世紀の前半に位置づけられている。エウボイアのカリストス出身のディオクレスで、アテナイを舞台

に活動し、その基本的発想は、ヒポクラテス学派とシケリア学派の双方に酷似していた。かれは、さまざまな作品をまとめたが、その中に食養生をめぐる有名な一冊があつて、今に残る長い断片類は、ユリアヌス帝の侍医を務めたオリバシウスの編纂した医学選集に収められている。しかるに最近、これらの断片の言語にイソクラテス式の文体訓練を介した「洗練」が確認され、この作品の成立年代は、目にされるあまたの特徴から、前四世紀の初頭よりは後半期に定められてよいと指摘されている。そうした推測はかなり問題視されていたが、別様の考察は、その正しさを裏書きするにちがいない。すなわちディオクレスは、アリストテレスよりは若年のほぼ時代を同じくする人物で、かれの弟子として逍遙学派のテオプラストスやストラトスの世代に属していた。かれらは師の下で研究に励み、その手で提供された第一級の現存証拠は、アリストテレスの生涯と業績を顕らかにした。ディオクレスの文体は、「食養生について」をまとめたヒポクラテス派の学者に劣らず高度に洗練され、その作品は、専門書ながらも「純文学」を目ざしていたといつてよい。この点は、前四世紀の医学の知的地位とその教育目標を知る上で興味ある事実にちがいない。かれの作品は、いたずらに修辭に走らず「率直」を旨とした。おそらくは、「学問的な文体」という新たな理想——アリストテレスの口から紹介されて世に行き渡った——に感化されたのであろう。ディオクレスは、現存する最も長い断片において、朝から夜に及ぶ「日課」を記述しながら自身の食養生論を展開しているが、「健康に占める食養生の役割について」の著者と違って、生きるための最善の道を説くにあたり、春・夏・秋・冬の四季に対応させて食養生を具体的に定めない。さらには「食養生について」の著者とも違って、食物、飲物、身体的訓練の諸タイプを体系的に漏れなく記していない。かれの食養生は、あまねく人間生活をカバーした全体的なものであった。その小さなドラマは、

完結するのに、丸一日しか要さなかったが、各年齢に応じて区分され、季節の変化も斟酌されていた。かれは、夏場の一日を長々と論じることから始め、次いで、冬場の——さらには他の季節の——一日をどう過ごすべきかを指図したが、これこそ、自身のねらいを実現する唯一の道ではなかったか。

初期の自然哲学がどうした影響をギリシア医学に及ぼし、新しい経験主義の医学が、今度は、プラトンとアリストテレスの哲学にどう働きかけたか——これらの点はすでに眺めておいた。哲学と医学は、このように「互恵」の関係にあったが、後者は、ディオクレスという人物において今一度、与えた以上のものを受け取ることになった。偉大なアテナイの哲学学校（＝プラトンのアカデメイアとアリストテレスのリュケイオン）に感化された当人は、手本となる一日のあり方を細かく記して「まっとうな食養生」の何たるかを説明したが、そこには、プラトンとアリストテレスの思考様式が誠実に写し取られていた。プラトンにせよアリストテレスにせよ、つねに人間生活を「全体として」眺め、そこから導き出された「正しい生活」の理想を、万人の基準として定めていたからである。食養生を論じた著者は他にもいて、かれらも基準は設けたが、単に、しかじかを為さなくてはならないと語るのみか、はたまた、ある種の食物の身体への影響を記すのみで、実際の結論を引き出す作業は読者の手に委ねていた。対してディオクレスは、いずれにも与せず、口にしたのは常に、何が当人にふさわしいか（＝有益なのか）であった。前四世紀の倫理も技術も、実のところ、「ふさわしさ」という観念に支配されていた。人間生活なら、何らかの基準によって、それも、時代の精神——過度に個人化されていたが繊細で典雅な面を失っていない——がもつとも受け容れやすい基準によって整えられなくてはならず、生活の細目はすべてからく、ほとんど感知できない「ふさわしさ」という網で包み込まれて

いた。ならば、ふさわしい振る舞いとは何なのか——おそらく、それぞれの関係において何がふさわしいかを察知する「機転」に導かれた振る舞い、を描いてないだろう。ディオクレスの食養生論は、こうした発想を身体生活に押し広げたものといってよい。かれは、みずからの教えを納得してもらおうと骨折る教師さながら、「ふさわしさ（ハルモットン）」という言葉で新しい処方それぞれに用いたが、そのひた向きさたるや、まさに敬服に値する。「ハルモットン（ふさわしさ）」こと「シユンメトロンないしメトリオン（釣り合い）」の観念は、かなり頻繁に顔を覗かせているが、ディオクレスの場合、アリストテレス倫理学の影響が大ではなかったか。別の観点から眺めると、かれは、アリストテレスの論理にも感化されていた。医者たちを非難してこう愚痴っていたからである、この連中ときたら、あまたの一般現象は、証拠や由来を必要とせず、端的に「在る」とみなすべきなのに、執拗に「なぜ在るか」を諸々の条件に求めて始末に負えない、と。あまねく学問の中でもとりわけ厳格な「数学」ですら、数と量には何らかの特性があると無条件に仮定しなくてはならないのを目にすると、論理的な心の持ち主は、内なる驚きを隠し得ないのだが、アリストテレスは、そうした仮説——「数学という公理」——が提示する問題を注意深く研究して、こう教示した、哲学にしろ個別科学にしろ、ともに立脚しているのは直接的な仮説で、この仮説は、いかなる証明も超え出ている、と。ディオクレスが医学に紹介したのは、こうした発想にはかならない。ヘレニズム時代の医学は、経験主義、教条主義、懐疑主義の三者が、「方法」をめぐって繰り広げた騒乱の主戦場となっていたからである。

食養生をめぐるディオクレスの解説は「目覚めた時点」からはじまって、これは、具体的に「日の出の少し前」に位置づけられていた。ギリシア人の生活はすべて、一日の自然な歩みに歩調を合わせていたからで

ある。主たる食事は宵に取られ、これは、夏場なら日没直後となり、冬場ならもっと遅くなった。食事を終えると、虚弱体質の面々なら急いで床に就くべきだが、壮健な面々なら、短くてゆつくりした散歩の後にそうした方がよい——かれはこう告げる。ギリシア人が早起きなのは、他の証拠からも知られるように、疑問の余地がない。ディオクレスによれば、目覚めるや直ちに立ち上がってはならず、四肢から眠りのけだるさが去るまで待つて、枕に押し付けられていた首や頭を擦らなくてはならない。そののち——たとえ排便前でも——少量のオイルで（夏場なら水を混ぜながら）身体全体を軽く、しかも万遍なく擦つてあまねく関節を折り曲げるべきである。続いての入浴は望ましくなく、勧められているのは、手を洗つて純粹な冷水のみで顔と目を拭うことであつた。加えて、齒、鼻、耳、髪、頭皮の世話も細々と指図されている——それによれば頭皮は、十分な発汗を促すように、しなやかで清潔に保たれるべき反面、しっかりと鍛える必要もあつた——。これが終わると、為すべき仕事を抱えた者は、食事をとつて務めに赴かなくてはならないが、そうでない連中は、朝食前かその後に軽い散歩を試みた方がよい。それは、体質や健康状態に合わせて、長かったり短かったりするが、朝食後なら、長すぎるのも速すぎるのも望ましくない。それ以後は、ゆつくりと腰を下ろして家内仕事をはじめるか、それ以外のことに手を染めて、「訓練」までの時間を過ごさなくてはならない。時間がくると、年若い面々なら体操場に出る、年離れた面々や病人たちなら、沐浴するか、どこか日当たりのよい場所に足を運んでオイルを塗つてもらうに如くはない。訓練自体の量と難易度は、当人の年齢を考えて最終的に決められてよいだろう。年配の面々なら、穏やかなマッサージを受け、軽く動き回り、あとは入浴するだけで十分かもしれないが、マッサージは、他人の手よりもわが手で施した方がいっそう効果的にちがいない。みずからの身体運動は体

育的訓練の代役を務めるからである。

午前の訓練に続くのが昼食で、これは、腹一杯でなくやや軽めが望ましい。午後の体育に先立つて、十分に消化されなくてはならないからである。昼食の直後に、暗くて涼しいがすきま風の入らない場所で短い午睡をとつて、しかるのち、自宅でのさらなる仕事や散歩に時間を割いて、最後には——別的小休憩をへて——午後の訓練に勤しまなくてはならない。そして一日は、夕食をもつて幕を閉じた。ディオクレスは、個々の訓練に何も言及せず、「食養生について」の著者がこれほど体系的に論じなかったら、ギリシアの「医の文化」の重要部門をめぐる情報は、いかなる文献からも得られなかったにちがいない。この著者は、あまねく食物と飲料を分類したのち、精神と身体のあるゆる駆使を列挙し、そこには、体育的訓練も含まれていたからである。対してディオクレスは、みずからの「食養生」からそうした訓練を切り落とし、それらはすべからく体育教師の手に委ねたが、主張される一日の全計画は、それでも、午前の訓練と午後のそれという不変の二点に立脚していた。かれの記述を介して、ギリシア人の生活全体が——他国人と違って——どれほど「体育」を中心に回っていたか、がよく理解されるにちがいない。的確な医学的処方に基づいた訓練を中心に過ごされないのは、一日のどの部分かを見逃さず、それらを、すべからく当人の体育的日課に組み入れることへの「勧め」——かれの食養生論は、こう記述されてしかるべきかもしれない。

以上のすべてが狙いとするのは、できる限りベストの体質を手に入れることを措いてない。つまりは、一般的な健康とあらゆる身体的活用を保証する、できる限りベストで永続的な「状況」を手にすることなのである。ディオクレスは、繰り返しこう口にしてはいるが、さりとて、この世が医学理論に適うように流れていないのも承知して、ゆえに、人びと

が生きているのは各自の健康に気を配るためなのだ、などと語らない。「食養生について」の著者も、何らかの社会的困難は避けがたいから、患者の生活条件と医者の理想に「折り合い」を見つけて出すべきなのは承知して、ディオクレスと同じ結論に至っている。かれはだから、余裕をもって健康に暮らせる面々のために理想の体制を作り上げ、次いで、せつせと働いて身体の世話にほとんど時間を割くことのできない面々のために、あれこれと斟酌した。ギリシアの医者はさまざまな著作をまとめたが、それらは、すべからず金持ちにターゲットを絞っていたと想像してはならない。同時代の哲学者たちも同じで、かれらが描いたのは、余暇に満たされた人間が生きるにふさわしい「生活」であつたが、この理想からの具体的結論は、個々人の手に委ねたからである。

前四世紀のポリスの市民生活では、おそらく、精神の磨き上げと身体の手入れに、他のどんな人びとの生活にも勝つて多くの時間が割り当てられた。身体の世話に携わる医学体系から浮かび上がってくるのは、民主政の下ですら、ポリスは社会的に「貴族政」であつた点にちがいない。ポリスが達成した文化レベルの高さは、ここから導き出されてくる。専門化した生存から生み出された主要なタイプ——職人、政治家、学者、労務者ないし農夫など——は一つとして、ギリシア生活の枠組みに当てはまらないだろう。これらのタイプは、ギリシアで発展した以上、当時も「見本」として顕著であつたにしても。ソクラテスの哲学やソフィストの弁証法の手順が、どのようにに体育学校で展開されたかを理解するのは、そう難しいわけでもない。「カロイ・カガトイ」こと一流の人士たちが、自由な集会の場を「骨の折れる専門化したスポーツの場」に変換せんばかりの熱心さでオイルを塗り、訓練に汗を流し、身体を擦り、砂を用いて全身の塵を払い、再びそれを洗い落としながら体育学校で終日を過ごした、などと仮定するのは間違っている。プラトンは、健康、強さ、

美貌という三つの身体の徳について、それらは、敬虔、勇氣、節制、正義といった魂の四徳と一緒にあって合唱団（コロス）を形造っている、と口にしてはいるが、これらはすべて、世界秩序にみられる「調和」——個々人の身体生活と精神生活の双方に反映された——を等しく象徴していた。身体の磨き上げですら、ギリシアの医者や体育教師に理解されていたように、精神的な事柄であつた。この磨き上げは、人びとに「至上の基準」を課したからである。すなわち、みずからの身体的諸力を氣高く健康に釣り合わせるには課された義務にほかならない、というのがそれで、同等性と調和こそ健康——およびその他のあまねく身体的完全性——の本質とするなら、いうところの「健康」は、いっそう偉大な事柄を意味するようになるだろう。それは、普遍的な価値基準に高められ、世界の全体と生活のすべてに適用されてしかるべきだからである。健康の基盤である同等性と調和は——この教えの底に横たわる発想に従うなら——立派で正しい事柄を生み出す諸力にほかならず、これとは逆に「プレオネクシア」こと越境的拡張は、そもその健康を乱して憚らない。ギリシア医学は、このような教えの根幹にして果実でもあり、ここから力と滋養をたえず引き出し、この教えは、個人や民族の特性に左右されたにもかかわらず、古典期のあまねくギリシア人が共有した普遍的見解であつた。医学は、ギリシア文化を代表する地位に昇り詰めたが、それは医学が、直接に体験されてわけでも入り込みやすい領域で、この基本的なギリシア理想がもつ不可侵の意義を——印象に残る形で——開示したからにほかならない。このような高次の意味で、ギリシアの文化理想は「健康の理想」であつたと言つてよい。

訳者あとがき

ここに紹介した和訳は、W・Jaeger, PAIDEIA — Die Formung des Griechischen Menschen の英訳として有名な G・Highet, PAIDEIA — the ideals of Greek culture —, Oxford, 1939 をテキストにしている。イエーガーを和訳する際に、独文特有の圧縮性と抽象性に本気で手こずっていたわたしは、この英訳の意識性と具体性にどれほど助けられたか分からない。ハイエットの英訳は、いわゆる訳本の域を超えて、それ自体が、見事に完結した一個の読み物であった。

大学における外書講読のテキストに、たまたまこれを選んだ経緯もあって、教室での講読に合わせて、あえて和訳をパソコンに入れてみたのだが、改めて読み返してみると、独文の原典訳とは違ったストーリーリ

の滑らかさが目に付いて、比較の意味でも、思い切って『紀要』に投稿することにした。

同じ中身ながら、著者が変われば、こうも全体が、様変わり、するものだろうか。訳文自体が原典を超えることは、まず見られないものの、双方がしかし、限りなく接近する事態ならあながち皆無ともいえないだろう。そうした数少ない例外の一つが、ハイエットの英訳にちがいない。

今回は、紙数の制約もあって、PAIDEIA (Book Four : The Conflict of Cultural Ideals in the Age of Plato (第四卷「プラトンの時代における教養理想のせめぎ合い」), Oxford University Press, 1971) から「1, Greek Medicine as Paideia (第一章、パイディアとしてのギリシア医学)」のみを掲載してみた。

(本学文学部非常勤講師)